

增補雅言集臨見

四十一

813.6  
I 619g  
WVND





813.6  
I619g  
Nnd



691357

増補雅言集覽卷之四十一

石川雅望集  
中島廣足補

○己の部

こ<sup>一</sup>う功(源末摘)八かうのこ<sup>二</sup>とつけらるゝをねた<sup>一</sup>と<sup>二</sup>おせどかのなぞ<sup>一</sup>こ<sup>二</sup>いえた  
づね<sup>一</sup>らぬをおもきこ<sup>二</sup>うは御心のうち<sup>一</sup>はおせ<sup>一</sup>いづ○宣長云わが手がら<sup>一</sup>はおせ  
まなり<sup>一</sup>○雅望云功をこ<sup>二</sup>うといひ<sup>一</sup>例ありあけまき若紫とも<sup>一</sup>ぐうづきてとあり  
(万)六<sup>一</sup>くうは申さば五位のかうふりと有てこ<sup>二</sup>うとよ<sup>一</sup>とたるか<sup>一</sup>

こ<sup>一</sup>う(狹)五十八下せんせ<sup>一</sup>經とぞい<sup>一</sup>とくこ<sup>二</sup>ういりたる聲のたふとき<sup>一</sup>よてよむなる

こ<sup>一</sup>うろくこん鴻驢館(源桐つは)廿このこ<sup>二</sup>を鴻驢館<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>りたり

こ<sup>一</sup>うちぐくれ(うつ)嵯峨の院(七十)詞北方わざといあらでゆふぐれよるのま<sup>一</sup>

ぞこ<sup>一</sup>うちぐくれせられさるや

こ<sup>一</sup>うい後代(源花の宴)十よろづのことよりの柳花苑なんまことこのこ<sup>二</sup>ういの例

ともかりつづく

こ<sup>一</sup>うく(盛衰)一女ま<sup>一</sup>もとの狐となりてこ<sup>二</sup>うくかいてうせぬ

増補雅言集覽 卷之四十一



こうト困(源明石)七いさうこうト給ひよければ心よもあらむうちまどろみたまふ  
(狹)廿六いりよこうト給ひぬらんとて御手づりらまりかひすゑて(源東や)卅こゝ  
よいとあやうき事の侍るよ見給へこうトてかんえうごき侍らでかん(同若菜)下五  
いりにくくと日々よせめられこうトてさるべき折うりむひつけてせうをこしおこ  
せたり(同野分)八おぢこうトておひけるよどりく聞えなごさめて(同あゝ)七  
日ねもよいりもよつる風のさわぎよさこそいたうこうト給ひければ(更級日記)  
泊瀬詣 夜深くいでもり人々こうトて(大鏡)八さい申せとをさあきやどよ坂のこ  
わきとのぞりりくバこうトてえその日のうちよ還向つらうまつらざりりくバ(空  
穂忠こそ)十をくちを左衛門の陣よめいて聞させ給へばをくちせめられこうトてか  
のたをりりごとをまうは(源手習)五十よひよさふらひせ給ふ日頃いさくさふらひ  
こうトたる人の皆やすとあどして(蜻蛉日記)中。消息ノ一町のそとを石そしおり  
のぞりかどすればありく人道 細 ころトていとくるうする迄ありぬ(同)中。まこの日  
のころトくらくしてあくる日をさかた人とのへと出さつ(つれく)上ノ五 ありつる  
苔のむしろよ並ゐていたうこそころトよたれ(宇治拾)三。うのあちこちありき  
ころトたるよ

○おもひころトて

(源蜻蛉)

四。ヨリノツクアケタル女房心

物の聞えあらは誰りさ

うトいあけさりいとかあらむ出来かん云々と思ひころトてをり(うつろ 嵯峨の院)

五十そや告よとの給へ思ひころトぬらんとて云々

○さゝころトて

(源蜻蛉)

卅御八講せらる云々 朝座よそて云々 物きころトて女

房もおのく局ありつゝおまへいといと人そくかゝるゆふくれよ

補 ころと (宇治拾) 七ノあゆみころとせさせ給ひて

ころと 好事 (文選) 與侍郎曹長思書 應休璉堂無好事客 (漢書) 人稀至其門時有好事者

補 ころと

水居

(後拾) 冬障子よ雪のあしとたりとる所をよとこべりける 民部卿 長家

「とやうへるあらふのさりれこををみ雪の空のあひせつるを(散木)「とや

りするまのいそぎ原こゑよしてとふれは鷹のふやりのらん(堀太) 鷹狩 匡房 「とや

る野中のあるれまけいそぎ空とる鷹のたがへりもせせ(新後拾) 雜秋性 威法師 「とや

りのあるれ下草りれよりかくれねてやきべはかくらん(同) 戀四 重家 「御狩野のつ

くれよなづむとさりのこゑよもさらよのへりぬる哉(山家) 上 「あせせたる木の

のそいさりおとさい犬りひ人のこゑさるかり(續千) 戀一 基俊 「よをかからあらせ

ていがかみりりれいましろのさりのこゑれこゝろを(夫) 十八 基俊 「とや鷹のいづれり



あるの枝からんのへるさりりよよびみてーがな(同)頼綱「人よきぬ心あらねどと

りりの、さりも木居よのりりこそそれ(同)顯仲「かりとさるつりれの鳥あそ

んとやこゑするたりのそらよまつらん(同)忠隆「をさめさるこゑれふよきのゑる

けれバ草とるたりよまりせてぞみる(新千)戀三「ふみりよふ道も狩場のをのれの

とこゑのまされるかたきをぞする〇顯昭散木集註こゑの鷹の居木をいふかり長

能哥云とりりさるすゑ野よとてるひとつ松たりへるさりのこゑよもせんこのう

たの萩原をこゑよして鷹の羽の萩原にふれてふのいろやりのるらんと讀かり鷹の

木居と人の戀よそへてよとからひせり後拾遺よ「それが身のとるへるさりと成に

たりとーいふれどもおひのわすれぬ

此宣長云スベテかのトイフベキチこのトイヘル多シ(源と、き、)廿見る

めこともかく侍りーりを此さが物を打とけたる方よて(狹)十七。姫心この別當

の少將と思せ給へるかめり

この(狹)六廿つひよいりあらんと思ふよとべき方おければこの海よや落入なまーと

思ひかりぬ(同)十一此よもぎが門とありー哥もあさり出て姫君の御めのとこの小

宰相といふがたろく聞えさりーかどかたるよも(源)十一此よき者ともいのか

かるありきをのみしてよくさるまどき人をも見つくるかりけりたまさきよ立出る

ごまかく思ひの外さる事と見るよとをりーう覺す(枕)廿七。清里居ノ時后いので

後清后へ參ル后其折ノよくき哥かれど此折のさもいひつべりりけりとなん思ふを

(源夕顔)廿三此人ひとりこそむつまーうもあらめ(同)浮舟六十此おとと、内舍人と

いふものぞきさる(金)秋伊房「いつそりよかりぞーぬべき月うけを此みるさりり

人よりたれば

此方ト(源)明石廿住吉の神をさのと始め奉りて此十八年にかり侍りぬ

此方ト(源)明石廿住吉の神をさのと始め奉りて此十八年にかり侍りぬ

此方ト(源)明石廿住吉の神をさのと始め奉りて此十八年にかり侍りぬ

此方ト(源)明石廿住吉の神をさのと始め奉りて此十八年にかり侍りぬ

此方ト(源)明石廿住吉の神をさのと始め奉りて此十八年にかり侍りぬ

此方ト(源)明石廿住吉の神をさのと始め奉りて此十八年にかり侍りぬ

此方ト(源)明石廿住吉の神をさのと始め奉りて此十八年にかり侍りぬ

此方ト(源)明石廿住吉の神をさのと始め奉りて此十八年にかり侍りぬ

此方ト(源)明石廿住吉の神をさのと始め奉りて此十八年にかり侍りぬ

此方ト(源)明石廿住吉の神をさのと始め奉りて此十八年にかり侍りぬ



るよぞあき(同) 覺寵「楨のやま木葉しぐさの降そて、袖まとまるの涙なりけり

このほど(源と、さ)四十此をさの大殿よのおそいまは補(新古)春下「此をど

いあるもいらぬも玉銚の行りふ袖の花の香ぞする

このりよ(白文)十二丹青以來唯一人(同)十五去年來(千載)序かの御時より此り

さ年のふさも、ちあまりよおよび云々補(万)十三こもりくのそつせの川れをちか

たは妹らひよ、このりたよこれのちて

補このりけ(兼輔集)「あさづまの三井の木れけあひてさくえゆくよをみ

るがさのいさ

このりみ(應神紀)長子カミ(源 柏木)三十りのきまの夕霧也柏木五六年のそこのり

とありしりと猶いとわりやりよあまめきあいされて物し給ひ(同 藤袴)十ヒゲ

ケ北方ノコチヒ どのほどのみつよつこのりまことなるりたのよもあらぬを

(同 紅葉賀)十葵上ノコチ源四とせをりりこのりまおそはを云々(同 朝顔)

初姉ノこのかまよおのすれど故おそとの宮云々松風ニモ女兄チ(同 若菜)

下七そのこのりみと思へる上手さもいくさくえまねびとらぬよあらん(細流)人

よまさりたるを云り師兄といふが如し補(同 横笛)七つねよこのりみよまほひ申給

といさめきこえあつりひ給

このりま心(源 總角)四十おもて打ありめておそをるさまいとをかりたりこのり

みで、ろにやのどりよけざりき物から人のさめ哀よあさけしうぞおのける

(同 柏木)廿心おきてのあらまろく人のこのりま心よ物し給ひければ補(同 横笛)

七十二宮のこよあくこのりま心まところさ聞え給ふ

このよ此世(源 紅葉賀)二この世よ名をえさる舞の師のをのことよ(千載)夏和泉

「そるよなほ此よのものとおおえぬのからかでこの花よぞありける日本ヲ唐ニ

この世とろく(源 夢のうき橋)十大將どのこの女二の宮れ御男よやおそいつらん

かといふもいと此世遠く田舎びたりや

このたひ(源 空蟬)五いでこのさびのまけまけり(同)七此さびのつまどをたよきて

いる

このむ好(源 蓬生)四此をろむりやうどものおもしろき家づくりこのむ(同 桐壺)

三うちぞとのこのましうおおえ給ふ(同 あふひ)七けまつねよりもこのまとの

へたる車どもの云(同 花の宴)十今めりし事をこのみさるわたりよ(同 帯木)九

人のありさまをあまたみあせんのこのみならねど(同 紅葉賀)廿うさての好みや



○このみこゝろ(源紅葉賀)廿。内侍ノつきせぬ好とてゝろも見まほしうかりまほ  
ればかりさらひつきよけり四。ナナ

**補**このくれ(万)十三「このくれのしつきをのへをほどゝぎはあれてこゆなりいま

くくらしも(同)十八「たこのさ死これくれしけし郭公きを死とよめばたこひめ

やも(同)十五このくれの四月ツキたて(同)廿おもふとちまはらをのこれこのくれ

のしつきおもひを(同)廿まをかゞとふとがと山まこのくれのしつき谷べを

このまし(源みをつくし)廿あそびどものつとひ参れるも上達部ときまゆれどわ

りやりまのまし(源みをつくし)廿あそびどものつとひ参れるも上達部ときまゆれどわ

まのまし(狭)三上あまりりとすきて何事ももて出て好ましき所をどのを

み給へるととつるのをらとどまこをありけれ(同)もふのほ二さふらひ童のまがた

好ましう殊更めさるるさしぬきのすを露けたは花の中ま下まで朝顔折て参るほ

どなど(枕)六ノ男云々まして情あり好ましき人は知られたるをどのおろりかり

と女思ふべくも男もてあさきり(源紅葉賀)廿好ましくとろやぎてもてあしたる

うもべのさてもあめれ(同)帝木四うちつけのすきとしきかどのこのましからぬ

御本性まで(同)廿えんまこのましきこと(同)葵一卅殿上人さものこのましきかど

いあさ夕の露をけありくをそのころのやくよなんをるかと聞給ても(同)若紫廿め  
もあやまこのましくみゆ五

○このもし(枕)五ノ寺へまうで物へもゆくよ好もしうこをれ出て用意をたか

らむあまりとぐるしともつべくいあらぬ(補)拾玉三「まづのをがふけゆくや

みの門をゞこのもしからぬまどるかりけり(山家)下「柴のいほときくいや

き名なれども世まこのもしきすまひ也けり

このころ(万)十二まがのねれたゆとや君が見えぬこのころ(源末摘)四このころ

のおぼろ月夜よ志のびて物せんまりでよとの給へ(同)廿侍従の齋院ままりか

よふわり人まで此ころいなかりけり(同)帝木卅このころ水せ死いれてましきり

たし侍ときまゆ(和泉式部集)下行末と契りしこといさふともこのころをりりと

ふ人もがな

**補**このてがし(山家)下「いそれの、萩がたえまのひまとよまのてがしそのそ

あさ死よけり(壬二)中「長月の時雨ふるらしから山のこのてがしをも色付よけり

このきみ(拾玉)三「夏となるうきよいとそぬ竹なればを此君とあふぐなりけり

このみ(菓)神代紀卅衆菓(源蓬生)十ありきこのみひとつ(同)権の本卅さき



このみひろひて参るやま人もあり

**補**このいろ(日本紀)鱒魚 舉能之盧

**補**このいろ(源 柏木)四十一「木のいろの雫ぬれてさりさま霞の衣きたる春りあ

このもかのも。家成卿歌合は基俊の判を清輔例語を引てのべさる事袖中抄五袋草

紙三五(後)人しらす 「山風のふきのまよ〜もとぢさのこのもかのもよちりぬへ

らかり(古)東哥ノ所「つくさ山このもかのもよかたのあれと君がとりけよまはり夕の

か(源 夕のほ)二このもりのもうちよろこびて(袖中抄)十五「わが里よ秋ぞまよ

けるさる山のこのもりれも、いろづれよけり(夫)五 永久四年百首俊「時あれや

みかぶち山と朝もよびこのもりのもよ蛙かくかり(拾玉)二「夜をうさねたえせせ

みゆるともよかを鹿住山のこのもかのもよ(扶桑拾葉集)二(著聞)十。大井川行幸

われらみとりき心のこのもりれもよまとひつたかたことのも吹風のそらよみどれ

つ、(袋草紙)三、五 予申て云躬恒が假字序よあまの川によりその橋をわたしてこ

のもりのもに行りふと書たる様よ覺悟を如何(源 夕のほ)三冊このもりのもよあやよ

きよをふるひ人もあつまりて

**こく**濃(源 檳柱)卅「あぞでかくそひあひがたれ紫を心よふりくおもひをめけんあ

くなりそつまときよやおほせらるゝさまいとわかきよらよまづりよきを(後)

戀一、右大臣 「いろふりくそめよもとのいとゞくなまよさへもこさまさるりか

○**こく**うらく(後)夏よみ 「いろといへばこれもうけきもたのまれせやまとあぞ

こちるよかよりの(源 あらし)五 すすつきこくうらくまざらよ

**こく**漕(源 紅葉賀)四 樂の舟々もこぎめぐりて(同 玉のつら)四 ことあるいつらひあ

き舟よのせてあぎいづるをどいと哀にあんおやえたる(万)廿一「潮さるよいら

この島邊こく舟にものるらんりあらきよまわを

○**こぎ**まひて(抄)コギマハ(源 くてふ)初 その山れさきよこぎまひて

**こく**曲(源 若菜)下、四十一「いそんやおそくのあらべわづらよきこくおそるを

**補**こく花ナドニイフ(古)秋下「もみちを袖よこき入てもていあん秋の限りと見ん人の

さめ(伊勢物)六十一「いよへのよひのいづらさくら花これるがごともありよは

る哉(散木)「あきまぎをたれみかりみよこきまて、いそこはかこのいろを染らん

(家持集)「さる風のふくよささざつうめの花君がためよぞこきとゞめつるこき所

ニモ 出ス **こく**齋宮女御集 内よて御まへの藤とかん一のびてこく人ありときりせ給ひて



でぐこん 御願(源みのり)三年頃わくくしの御願までかへせ奉り給ひける法花經千部いそぎて供養し給ふ

でくこんのひ 五卷(源蜻蛉)廿七 五卷の日をどのいみトき見物ありければこあたかおたの女房よつきてまゐりてもの見る人おやりりけり

こくこう 國王(源<sup>五</sup>の<sup>あ</sup>)下八源 是のこくこうの御心やおき給えんとせりり

をそぐからん 云々(竹とり) 十。勅使詞 國王の仰をまさし世よをみ給えん人のうけたまさり給えでありふべきや 云々(同) カクヤ 國王の仰をそむりばそや

殺し給ひてよりといふ(源すま) 四十 宮づりへは出し給へりこくわろをぐれ

ときこえさるよあまりてむたりくをまめりく見えさせ給へり

こくたち 穀斷 (宇治拾) 十二 ひさく行ふ上人ありけり五穀をたちて年來よかりぬ

云々 穀たちいく年をりりよかり給ふと問されければ

こぐれ(新六) 笠 雨をぐるとやまの道の木ぐれよりあがらきかさぞみえかくれ

そる(堀次) 忠房 「神垣やみむろの山れあぐれよもみえまがぬいあはのさまがき

(能宣集)七 木ぐれつ、春のかりをよなりよとり今やさくらんやまぶさ花(堀太)

照射 「ともしする鹿よもあそぬ物故よこぐれの下よ夜をありしつる

こぐれ 木暗(万代) 冬 為忠 「わけてゆく二村山のこぐれよりむをまどりよ霰ふるあ

り○万葉よ木のくれや又木のくれトやまとあるよ同トと河社よいへり

○こぐら(四條大納言集) 「相阪の關まで月にてらさあん杉のむら立こぐらかる

らん(曾丹集) 四月 「日くるれば下葉こぐらき木のもどれ物おそろきまつゆふ

ぐれ(同) 三月 「りさあし花見よきたるけふもあれよもの山べいこぐらかりけ

り(同) 三月 「あさぢふもせむめがくれよなりよけりうべ木のもといこぐらかりけ

り(源夕顔) 廿 あれさるかぞの志れぶ草よたりて見あたられさるたとべかうこぐ

ら

でくねち 極熱(源<sup>雷</sup>木) 卅 でくねつのさうやくをふくして(空穗たつの村鳥) 三 かく

てでくねちのころいされもくをさく内へも参り給えきこもりおひまは

(同 國ゆつり) 一五 むりか、いをでくねちよこのつりとのへこそ 云々

でくらく 極樂(新古) 釋教 源信 「わきごよもまづでくらくよ生れかば志るもいらぬも

なむりへてん(源はし姫) 十 極樂おもひやられ侍るかりとこどいよめづれば(狹) 三

廿。八講ノ極樂もろくやとおぞしむらる(新古) 釋教 「あるべある時よごよゆけ

六。所ニ

七

七



くらくの道よまとへる世中の人(續古) 釋教源信「てくらくをねがふ思ひのけふりこそ  
むらへの雲とやがてあるらめ

てくのおび 玉の帶拾 雜上 大貳國章 てくの帶 より侍りけるをつくりよりのなりき  
てりへいつりそはとて「ゆくすゑれしのお草よもありやとて露のりたともおらん  
どぞおもふ〇てくの玉なりてくぎよくおかトといへり

てくのもの 曲ノ物琴源若菜 下ノ物 のしらべ てくの物 おもひもけよをちをバつ  
ノ由ナリ 卅七 物のしらべ てくの物 おもひもけよをちをバつ  
ぎの物 よゝるのさもありり かぞの給ひて (同東や) 五 せやりりなる曲の物など  
をへて

補 こくび (著聞) 卅二 畠山 たて こくび をつよく打て袴のまへこしをとらんとしけるを  
こくも 國母 (うつは後蔭) 上女 の天道 よまりせ奉る天の掟 あらばこく母女御ともあ  
ま掟かく山賤民の子ともかれ

こや 小屋 (拾) 戀四よみ 一つの國 れかよはこりよつくるかるこやといをかんゆき  
てくるべく (和名) 十 居處部 助補 和名 一云 比太 如衛士屋也 (拾) 冬 重之 「あしの葉よか  
くれて住一つのくよのこやもあらは冬いさよなり (相摸集) 津の國 よむ 昆陽の  
入道うと物がさりおほりたよいふ人かりけり門の前をさたるとていそぐことあり

てえまるらむかよとるといひけきバ「なよそびといをがぬ旅の道帯イからむこやとと  
りりのいひもしてまよ 雅望案四句こやよ地名チイヒカケタルトモチロンカ又云イ  
本ニ常あらでトアリテハオダヤカナラザルヤウニオボユイ

カ 補 (玉葉) 賀成 「玉椿 まつねの松 をとりをへてきみをぞいそふ 一づのこやまて  
(續後拾) 冬 伏見院 「霜さむき難波のあしの冬枯 よ風もたまらぬおやのやへぶき (新  
千) 春上 後京極 「霜がれのこやの八重おさふさきりへて蘆の若葉よもるりせぞふく (新續  
古) 秋下 寶篋院 贈左大臣 「あしの葉よおともかくれせつのかのなよものこやの衣うつかり

補 (頓阿集) 「かよそがたこやのかりねの夢 またよこをいりぞとつ浦風〇混  
陽の名所とこめたりと云いわろしとよ 小き屋 なり名所の 昆陽 の和名抄 よ攝津 國島  
上郡 兒屋 郷 また 武庫郡 兒屋 古郷 ありこの二つの内 あるべし さて後拾遺 よ長算 僧都

「かもめこそよがれよけらしるお野なるこやの池水うそ濁りせり是に爲奈野なる  
こやとある爲奈野の續日本後紀十四の卷よ河邊郡爲奈野とあり和名抄よも同郡な  
り神名式にの豊島郡に入れりさてりの二つの兒屋の内いづきり此爲奈野よの近き  
を國人よとふべし又一かの二つの外よ爲奈の内にもこやといふ所あるりいづれ  
よもあれ難波との所隔れり津比國の昆陽とよみて小屋の意をりねたる哥のおおけ  
れども難波よよと合せたる例のかりをべて難波よこやとよめるの只ちひさき屋也



思ひまがふべからば新千載旅部一爲明卿女とやといふ所よて難波をよと合せたる  
哥あれど證といへぐさ

こや 蠶屋補(散木)「山里のこやのえびらよもる月の影よもまゆのそぢハ見えつゝ  
。昆陽ニ蠶屋補(詞花)夏匡房「おぎもこがこやのののの五月雨にいりぞをばらんをつ  
びきのこと

こや 是や(源 帚木)十「うきふしを心ひとつよりぞへきてこや君が手をわりるべき  
をり(拾)雜上「あさやらけひぐらりのこゑきこゆかりこやあけくれと人のいふら  
ん(源紅葉賀)十「ともおもふとぬささいりよあぢくらんこやよの人のまどふてふ  
やと

こや 後夜(蜻蛉日記)中申の終りたりり寺の中よつきぬさて後夜行ひつればおり  
ぬ云々(玉葉)五 後夜のおこあひしとべらんとて手あらひにまりたるよ(榮木綿  
四手)六こやのかねの音もおどろくゝあうたこゝめされければ(源松風)七 入道例の  
こやよりふりう起てをかまへりうちておこあひいまたり(雲圖抄)六書 初夜自  
亥二刻至于子二刻後夜自子三刻至于丑刻

こや おき 後夜起(瀆松)二六 後夜おきして行ひ給ふ折ハ(狹)三、中 嵯峨よいと、

く参りたれど後夜おきの御行ひのまよ御堂よおそませバ

補 こやて(夫)廿五、衣笠「むりつせのいひのおやての世よふれば人の心よあひたが  
へめや

補 ちやま 臥(記傳)三十九ノ(万)九ノ妹之臥勢流

こま 木間(頼政集)上ノ「すまよ一の松のこまより見わさせバ月おちりゝるあまぢ  
しま山(拾)雜上花山よまのりてまをけるよ駒ひきの御うまをつりまよりけり  
バ「望月のこまよりおそくいぞつればとどろくゝぞ山のこえける補(万)廿五「う  
ちあびくそるともしるく鶯のうゑ木のこまをかききたらん(忠見集)「さやりに  
もとえぞありけるあふさりのこまよりとゆる望月のかげ(万代)秋上「高圓のこ  
ま吹おろはゆふ風よ野路のさゝもら露とどるらん

こま 高麗(源梅枝)十こまの紙のうをやうどちさるがせめてかまめりしきを

こまよしき 高麗錦(空穂樓の上)四 ころふのてん上よ云々こまよしきそりたり

こまびと 高麗人(源桐つは)廿その頃こまうどのまられるがかり補(同梅枝)初

こまうどのよてまつれりけるあやひせんき共かど

こま 護摩(拾玉)四ノ「護摩の火の灰をかき灰よ種まきつまきつる種ハうはき物りの



こまぬぬ(榮か、やく藤壺)十このさびの藤つやの御まつらひ大床子たて御帳のまへ三のこま犬かとも常のことかがらめとままりさり(榮日あけ)九大床子御ぐりあけておそいまり御帳のそとのまゝこまぬぬのりほつきもおそろいけかり(枕)五宮をトめのさやうしくこま犬大床子かともてまゐりて御ちやうのまへよりつらひす(遊仙窟)牀頭玉獅子注陳云以玉刻爲師子安牀頭逐鬼魅并得鎮押氈席  
**補**こまぬぬ(万代)戀二よみ八しらす山城のどそのさりの瓜つくりこまぬぬとおもふ折ぞおろる

こまどりの(源神)四十ふとつくり韻ふたぎなどやうのまさひわざをもしかと云殿上人も大學のめいとおろつとひてひたり右よこまどりのかたわりせたまへり○私云三光院かど申されし勿論左右よわりつ事也其座の次第あるは左右へ一人づゝませてくるをいふやうに申されし也たどへば左一三五七九かくのこど一左四五八九かやうにかどのあるべからざる(源わあき)二小弓との給ひいかどうちゆこのまぐれたる上手どもありれば召出ていさせ給ふ殿上人どもつきつさしき限りの皆まへりへの心とまどりの方わきて**補**空穂(菊の宴)十殿の君さち十ところをいつところづゝこまどりのとりて少將のあたをといふ所のおくよとり

もかよぬぬ山の中よこもりらうすけのまづのをといふ所よりおくよおなとやうなる所よ人よもあらせでこもりてあらはれよ

こまぬき(宇治拾)十五こまぬきてまこしうつぶしたるやうよてゐられさり此人もいらよとおもひてむりひるたるほどよ(新六)一秋風「もしやとてこゝろまづむる夕ぐれよこまぬく袖を秋風ぞふく

こまろ(源野分)十まめやりよつあうまつりてまえ奉れ内のおとゞのこまろよしもあるまどうとこそうれへ給ひしり(同明石)卅こまろよかたらひ置て出給ひぬ(同桐壺)九後のわざなどにもこまろよとふらせ給ふ(伊勢物)九十後よ男ありけれど子ある中かりければこまろよこそあらねど時々物いひおこせけり(空穂俊蔭)下七例のでくの手をひりて思ひの物をひく時よりくつ御ろくもいらゝのせん猶まこ

しこまろよあそびせとせちよのまへ(同樓の上)下四此まつらひこまろかあるありさま作りてたるてりかゞやきめづらなる(同)上七樓のあうをさしき句ひ限りか(朱雀院)こまろよ御覽するよありせめたければ(蜻蛉日記)下ことまらよてこまろよかどしもあるぬ人のふりまへるをあやうがる(源楨柱)三ことよこまろなるうしろまき人のかまほのまいたる宮づりへよ出さちてくるしけよああら



んどぞ(蜻蛉日記)(詞花)雜上「ふる雨のあゝともおつる涙りかこまりし物をおもひくざけを(源之しひめ)卅九九かくくこまりし生れ給ひけるをそのこともよくおせえてきこゆ(同松風)初人々のつとひすむべきさま云々見所ありてこまりなり(同総角)初こゝの法服の事經のりざりこまりなる御あつりひを人のきこゆるまゝさかひて(小大君集)廿一「ありとまろこまりまいづらちら瓜のつらをたづねてこれあらさかん(紫日記)五十やうどひもてあゝらうくくをりしとけさちよれずとよふくらりある人の顔いとこまりまほひをりしけかり(源浮舟)十五あれのさくらうたはよこまりある所ぞいとをりしき(うつは藏開)中四よきさういとおほくもたまへる人ぞよれてうごこまりなる寶物のかこまりこをあらめ(紫日記)四十よべの御おくり物けさぞこまりし御覽る(とりりへせや)女房のあごまをりしけまこまりまかつりしうらうたはある事なる物なき云々(源横笛)七みこさちよりもこまりまをりしけまてつおくときよらあり(玉葉)雜二資宣女「降をくぐのきさの雨のゆふぐれし露こまりなるさゝがよのいと(風雅)秋下「立をむる死りかどそれバ秋の雨のこまりまをくぐゆふぐれの空(玉葉)雜二俊成「いもぐうへ柴のいはりの雨をれやこまりまきく袖のぬるらん(源梅枝)十六あまのかこのまたこまりまをさうかつり

しきり(枕)十九かうらいへりのたゝこのむろあをうこまりまへりのもんあざやりし(源楨柱)十五さるこまりあるむひのめをなおもいりて  
**こまがへる**(空穂國讓)卅五年老ぬるさりの寶のかりけり昔ありせば此人たちいりまみまやからまゝとこまりへらせ給へり(源玉葛)廿九源右近例ならせやもめ人の引たがへこまがへるやうもありり(蜻蛉日記)下「霜がれの草のゆりりぞあもれかるこまがへりてもなつけてしが(和泉式部集)上同日清「駒すらすさめぬほど老ぬればあまのあやめもいられやのる清少「さめぬほささめぬささもねさあやめ草ひさきへりても駒がへりかん  
**こまがた**(榮殿上の花見)十五唐やりの舟よこまりたをさてかゞみぢんしたんあどどさまをりしきさまよつくしり  
**こまつり**(木祭(夫)廿一「柚人のをのみみてくらどりそへてこまつりをら谷ふのく入る

**補こまつ** 小松(うつや吹上)十五「かぐきよのふくるもうれあさつゆをおどけこまつのかげすすめめ(同)「風をいたと露たよおるぬ小松まの宮人すむかはやかりらん廣足云これらいた松の事ありちひさき松はあはらす陰おすいひとあるおてしるべし



**補**こまつぶり(宇治拾)十鉢こまつぶりのやうよくるめきて

こまつ帝 光孝天皇元慶八年正月廿三日即位仁和三年八月廿六日崩九月二日葬小松山陵號小松帝皇年代

こまをめて(馬内侍集)寛和二年内裏歌合「蛙かく井手のわたりに駒をめて行てりももん山ぶきの花」

○**補**こまをべ(和泉式部集)「旅人のこまひきなべて打たてばやとの廣野もせさくぞありなる

**補**こまのたつぐみ(頼政集)「落かゝるかみさやけきこひちゆく駒のさつぐみつゆふーまけり

**補**こまのつまおと(頼政集)「このもちる山路の石のえねどもをあらざる、駒のつまおと

**補**こまくら(万)二云々をりまむきけり妹り木枕

こまやり(源みのり)廿うはむみとのたまひーよりの今をまーこまやりよて奉れり

**同**幻初女房かどもとー頃へまけるの墨染の色こまやりよて(同)御手こまやりまのあらねどらうーとらうさうなどをりーうかりまけり(同)桐つは十こまやり

まか、せ給へり(同)明石卅例よりも御文おまやりにか死給ひて(同)あふひ卅是の今すこしこまやりある夏の御直衣よ(同)松風十こまやりまのさらひいで給ふとて

**同**夕顔五こまやりにかさらひ給ひて(同)夕きり六いとをりーきささのたまさればこまやりまのらひて(同)松風廿文カキをたぬこまやりまみゆ(同)句宮九わ

が御子どもの君さちよりも此君をばおまやりまやんでとかくもてかーかーづき奉り給ふ(同)こまやりまのらひ給ふ(同)廿身かりまどつきこまやりまうつ

くーけかり(同)と、き、十なまこと筋をこまやりまかきえたるの(同)夕かほ一五十九むけ心ことにせさせ給ふまたうちくーまゆわざとー給ひてこまやりまをり

ーきさまあるくー扇おろくーて(同)五十歌あふ迄の云々くちまけるかあこまやりあることどもあれとうるさけれをか、せ(同)す、虫二あまた佛けうーのぞさつお

のくーひやくごんーてつくり奉りたるこまやりけうつくーけかり(同)と、き、四五こまやりまをりーとのかけれどあまめきたるさまーてあて人どみえたり(蜻蛉

日記)中文詞云々かどをべてさーむりひたらんやうよこまやりまかきたり(遊仙

窟)煙霞子細コヤカ

こまけ(源をとめ)五十女房の曹司まちどもあてくーのおまけぞ大方の事よりもめ



でたありける

こまけのもの(うつろ 吹上)下四。吹上ヨリカ此方よのすぎさをこよりはとめてそこ  
をくのこまけのもの皆とらせ給ふ

こまふえ(源 未摘)九こま笛とり出給へり(同 梅のえ)十いとまきこまふえをへて奉

り給ふ(和名抄)四兼名苑注云籥以灼反今按所謂高麗用此字歟和名古萬布江(夫)兼昌一波の音よたぐへ  
てぞきく住の江の汀よてきくこまふえのこゑ

こまと(狭)二いでや源宮をけかけあめればまいてをりとくしう見かい給とと  
てこまとくとやり給ひつ(同)三大殿よもこまとくと聞えさける人ありなれば(同)

十云々とこまとくと申す人のありければ(同 わのち)下八ふたがさねよこまをま  
りきたるを見給ふ(竹取)下かくや姫をえ戦ひとめせかりぬる事をこまとくと奏

す(蜻蛉日記)上覺つりかき事なくひとまきよこまとくとかきてあり(散木)中「ひ  
まもあらばをくろよたてるあをさぎのこまとくとこそいとまをいけれ青鷺の駒と

入たるあり駒補(宇治拾)三さらをこまとくとときりて云々まおとよわらどこまをま  
の毛色あり補とときり入たり

こまあそび(うつほ 吹上)下三こまやの人とも馬一つよふさりつけつゝおまがささ

きよたてゝこまあそびつゝ出てつきくよみか引あらべさり(同)四馬ども引い

でこまあそびいできたり鷹どもすすゑて鳥の舞いできたり新猿樂記桁梁垂木木舞

こまひ(宇治拾)十五もてよいたるきこまひをわりたきつ(新猿樂記)桁梁垂木木舞

こませまほしき(夫)四惠慶「おもふ人おませまほしき所りあみり死のそらの花の  
さりのり

こけ(万)十一あべ橋のこけむすまぞよ(堀百)菅紀伊「うちから人なければ君  
が代りけつづみも苔おひまけり

補こりのいそや(拾愚)中「よーさらばともあひそてよ秋の月こけのいそやよ世  
のそむくとも

補こけのいそ(續千)秋下「あれまけりどが故郷のこけのいほ見よのまよ月  
のそめども

こけのたもと菅ノ袂(千載)雅兼「うれしさをりへたもつゝむべき苔のよも  
どのせそくもあるりか補新古雜下宜秋「何となくきけはかまどぞこぞれぬるこ  
けのよもよかよふ松風(同)雜中「いつりこれ苔のよもとよ露おきてあらぬやま  
ちの月をとるべき







こふ(源玉葛)四よるひるかき戀て云々(同)五まいてるるかきを思ひやりて

戀かきて(万)十四いにへにこふる鳥りも(源若紫)四十よるひる戀聞え給ふ(古)

戀又のと一梅の花さりり月のおもろりりけるよこそをこひてかの西の臺よ

きて(齊明紀)「君が目のこすきからよさてゝゐてかくやこひむも君が目をやり

こふ(乞古)夏とかりよりとこかつの花をおひよおこせたりければ云々(源帚木)四

六又の日小君めいされば参るとて御かへりこふ(同野分)十ことと一からぬ紙や

とべる御つづねの硯とこひ給へを

こふ(國府催馬樂)みちのくちたけふのこふよこれのありとおやよ申たへ云々

(拾)源重之がこふよもべりけるようまのあづまよりのやりて(宇治拾)十二虎

のこふよいりて人をくらふかりといふ(同)十九こふの中よ入りきて人ひとり

かいらをくらひて肩ようちりけてさるかりと云々(同)冊國府よりへりきて守よか

うく射ころつるよいふよ云々

こふ(劫源空蟬)上碁打とて待給へやをこいぢよこそあらめ此にたりの劫をこそ

あどいへど(拾)哀傷「こふをつむきたら川の龜おれば法の浮木にあそぬかりけ

り(和泉式部集)「もみぢの散もをいまた龜山のこふをつくりてかりもこそすれ

こふ(貫之集)「龜山のこふをうついでゆく水よこきくる舟のいくよへぬらん

こふ(後拾)賀後朱雀院うまれさせ給ひて七夜よよみもべりける

いとけあき衣の袖いせそくともこふの石をいかにつくしてん(赤染集)かめ井を

とて「こふをへてそくふ心のふかければかめるの水のゆるる世もあら(樓炭經)

云方四十里ノ石ヲ三年ニ一度梵天ヨリクダリテ三銖ノ衣ニテ撫テツクスヲ却トス

(拾)賀讀人「君が代にあまのそころもまれよきてあづともつれぬいそをあらなん

こふ(業源手習)十こゝろとよさせけてんりりそれよまねんこふつきけりとお

もそんとており給ひけり(九條右大臣集)「をのゝえのくちけんりたもおも不え

せこふをつくさんと思ひいそとよ(源重之女集)「のりの海よりける舟のこふを

へてめぐるうさよあひよけるりか

こふ(宇治拾)三右のかほよ大あるこぶある翁ありけり(同)ありこぶあとりこ

かく

こぶかく(木深源)こぶ(源)こぶ(源)六(是)くよりからぬ山のけしき木おろく世はあれてさ

みか(同)森のおさちこぶろくこゝろすこ(同)タ(タ)七山おろく心をこ

く松のひびき木おろく聞えおたされなとて



こふらく(拾) 戀五坂 上郎女「志をてばいりぬる磯の草かれやとらくそくなくこふらく

のおほき(躬恒集)「濁り江におふる玉藻のミダくれて我こふらくをうる人ぞあき

補(風葉集)別「ある、かみ雲のさゆめをへたてよいつともあらど君をこふらく

でふん 胡粉(枕)八、いやいなる物、布屏風の云々 櫻の花おろくさりせて胡粉を

さかどいろとりたる

でふく 吳服(空穂)たつのむら鳥 二十長櫃のからびつ一よろひにくら司のでふく 云々

補こふく (宇治拾) 十一。河ニ身ナグル 十九。聖ノトコロ 十九。さりさまいりてこふくといゆるを

こぶみ (うつろ) 藏開中こぶみよかけり(同) 云々こぶみぶくゑのうへまぞよむ

補こぶい 拳(著聞) 十六、友正こぶいとにぎりて犬の口へつき入てければ(雅亮装束抄)

こぶいをよぎりてあてふさこぶいをりりて

補こぶいのそま (著聞) 十八次の年の春人のもとよりあぶいの花をおくりけるを云々

哥云々 哥ぶいの花のさほいたきりな(拾玉) 五こぶいの花のゆゝくどくいできた

るを静賢法印がもとへつりははとて歌々 云々へ「たまひるこぶいの花よあそは

きば梅もさくらも何からぬりあ

こゝ(狭) 下二 ひぐくしき事とむつりり給ふめりきこゝまの只何事も御心よまり

せてと思ふ(同) 十一上 参らんとつるを風よこゝまあやまうてくらうとべ

りぬるを(土佐日記) 下彼國人きゝゑるまどうおもえたれどもこのこゝろを男

も下よさまをりきいどしてこゝのことをつさへたる人はいひらせければ(うつ

ほ 國讓) 上八、こゝまやがて黒きさままでもやみまべりなんあゝかからもあん(竹取)

下こゝまも心よあらでりくまりるよのせらんをさよみおくりたまへといへども

(源 晴蛉) 二十とぢめの事をしも山がつのそりりをさへおふなんこゝのさめもからさ

かど(うつろ) 藏開中 十六こゝまの志ら二所の御中によろゝかるべく定めて(同 初

秋) 十九 御息所いりよあゝまもともかくも思給へんよろづの事の給とせんよこそ

い御いらへされをこよゆるし給ととこそいらへこゝま聞えさせん何りのさ

てあらんよ(源 楨柱) 卅御りへりこゝまのえ聞えどとらきまゝ、覺いたれば(同 東

や) 四十 こゝろまいれてみ給へるほりや更よあゝととゆる所かくこまろまをり

けあり 補(枕) 廿四かどりまららせ給とぬをいひてこゝかる所よあからさまま

りりてまらんといひていぬるのちよ(同) 廿七うつちの木よあらんきりておろ

せこゝにめれをさといひて

こゝ(宇治拾) 卅返しせんと思ひてこゝどうめきけれどえせざりなり



こゝ(万)六十四さはたけの大とやこゝとさためけらゝも(源東や)六十一いりてこゝからぬ所は志をありまゝと打かけきつゝいふ(同やとりき)九十ととめもこゝよかんやどり給へりいと申せよ

補こゝ(ナル音)万(十六) 辛鹽爾古胡登毛美

○補こゝ(万)十五「秋のよをかぐまにりあらんかぞ許已波いのねられえぬも獨りいぬれば(同)十七、島まよのこぬれ花さきまゝ、そくも見のさやけきり(空穂 嵯峨院)二十、そくのまこのおほちよて(同 樓の上)七、二十くそくのみにたちかんさちめ

○こゝ(もと) (源 寄生) 九十さゝやりよあてまゝめやりよてこゝとあゝくもゆる所なくおとせまば

○こゝ(古) (發語) 序 これよりさきの哥をあつめて万葉集とあづけられさりけるこ

こよいよゝへの事をも哥のこゝろをもおられる人ごづりあ一二二人なりきゝりあれど

云 ○古事記ノ文發語ニ於是云々 數シラズ多シ

○あゝもりこも (源末つむ) 初こゝもりこもうちとけぬかぎりのけいさをと心ふりきりとの御いとまゝに

○こゝ(を) (枕) 七ノ。清ノ里居へ來ルこゝなる所はあからさままかりて

參らんといひていぬる後よ

○補こゝ(忠見集) 四月は池のへんのふぢをもてあそぶ「池ちりくうつりよけりな藤の花こゝのそこのといりてをいまん

○こゝ(抄) (通事) をいふ

こゝ(源 玉葛) 卅云々 かぞかたらひ給へばうつといとうれしくおもひつゝ、近詞とゞ御心よかん

○いれのこゝ(躬恒集) 三十「ちりぬともかけをやとめんふぢの花池のこころのあるりひもかく(榮哥合) 十六笛けいさをり吹すさびていせの海うたひてい

けの心ままりせてさをさして參るをみれば(山家) 下「おもひあまりいひいでゝこそ池水のふりきこゝろのいろのいられめ

○かまのこゝ(夫) 八延喜六年 云々 依雪波心寒「ふる雪は波のこゝろもさむからゝりざがくれとやへたまたちよる

○のこゝ(源 帚木) 卅まづりたき詩の心をおもひめぐら

補こゝ(万代) (秋上) 諸人のこゝろいるらゝ梓弓ひくまの野べのあきまぎの



さあ(源さあき)五十<sup>一</sup>ひてこが心のいるりたはなびき給よこそ侍らめ

こゝろいられ(源竹川)廿<sup>二</sup>がいと人知られかる心いられをうたへめなれてあ

なづりそめられよるとおもふもむねいさければ(源末摘)十<sup>三</sup>心いられうたてあ

るもてあしよのよもあらト(同總角)六十<sup>九</sup>のさりよおせせこゝろいられうたてあ

と聞え給ひそをさそをへ聞え給へ(同藤の裏葉)二十<sup>二</sup>人ころうかづらひ心いら

れせでまぐされさるあんすこ一人よぬけさりなる

こゝろを(源繪合)三<sup>三</sup>さしぐりの箱のこゝろをよ哥云々(拾)上<sup>維</sup>ものへまうりける人

のもとよぬさそむすひ袋よ入てつりせれとて「あさからぬちぎりむすべるこゝろ

さいさむけれ神ぞするべかけりる<sup>能</sup>宣○類聚雜要よ心葉の圖あり大小それくかそ

り有うそものきぬよ銀の梅の花を五所おつけてそれよあけまきのいをつけさり

こまの物さも入たるうへよりざりよおくものなり(榮初花)五十<sup>一</sup>そこ一よろひよ

きものいれてつりせれこゝろをの梅の枝かり(和泉續集)もそちのいとおろち

りさるをまこのふたよいきて「人しれぬさごこゝろをよあらねどもかきあつめて

もゝのをこそおもへ(源梅のえ)四<sup>四</sup>るりのつがふたつすゑておろきよまろりつゝ

いれ給へり心をこんりよハ五葉のえたえろきよの梅をえりて云々○北邊隨筆よ

考あり圖も出せり伴雄説の嚶々筆話よ出せり

こゝろをへ(源桐つは)廿<sup>九</sup>御こゝろをへありておどろりさせ給ふ(同早歳)三<sup>三</sup>哥のお

ころをへもいと哀よて(同桐壺)廿<sup>二</sup>りへりていかかかかるべき心をへをおもしらく

つくりたるに(同總角)三<sup>三</sup>經佛供養せらるべき心をへおどろきいで給へるすゞりの

ついでよ(同)五<sup>五</sup>例のふる人召出てぞかたらひ給ふと一頃の只後の世さまの心をへ

よて(同橋ひめ)六<sup>六</sup>御念のひまよしよこの君達をもてあそび云々そりあきあそ

びとさよつけても<sup>姫君</sup>心さへどもを見奉り給ふよ(同桐つは)二<sup>二</sup>かたよけあき御

こゝろをへのさぐひあきをたのよまてまドラひ給ふ(同東や)六<sup>六</sup>もよおもひせなる

御こゝろをへもええは人知らへよりなうかんあるべきといひけるを(同帚木)卅<sup>卅</sup>

水の心をへあとさるりよをりくあたり(同梅のえ)三<sup>三</sup>りうをの御もことり

のやうつがのそがたひどりの心をへめめかれぬさまよいまめりう(伊勢物)初<sup>初</sup>云

といふ歌の心をへなり○伴信友云(紀)ニ意、意氣、立操、心許、ナドコ、ロバエト訓

り心緒林節(後撰集)戀<sup>戀</sup>二<sup>二</sup>讀<sup>讀</sup>ひ文つりせせども返事もせざりける女のもとよ遣しけ

る「あやしくもいとふよそゆる心うあいらよしてりのおもひやむべく此をゆるノ

意ニテこゝろをえノ義ヲ知ヘシ(源常夏)廿<sup>廿</sup>。近江君くれにも参りこむと思ひ給へ







てゆりんよはやんでとかりるべけれとおぼは  
心させびと(源 夕きり)六とてろ人よさへる心させ人よかりてさまとよ情を  
見え奉る

心よいらて(源 之し姫)三後は生れ給ひ君をばさふらふ人々も云と打つおやきて  
心よいらてもあつらひ聞えざりけれと

○心よいらて(重之集)三此御手本いるべき箱よあいでをぬひものよすべとせめ  
られける「いづくぞやふたみのうらのありといひ心をいれてとまよものを

心よいらん(源 浮舟)十此内記のぞむことありて夜ひるいりて御心よいらんとお  
もふころ

○心よいらる(万代)(新千)春下大炊御門右大臣「梓弓をるれこゝろよいるものよ高まど山  
の櫻也けり

心よいらせ(源 竹川)十和琴をさく心よいらせかきわと給へるけいさいと  
ひびき多くきこゆ

心よとある(源 わけまき)七十そりかう人をと給ふにつけてもさるの御心よとある  
るどりか(同 うつせみ)七心よとあるをりかき頃まで

心よりゝる(源 ゆふのは)三十そりかりゆふべよりあやう心よかりて(同 帯  
木)六おぼすことのみ心よかり給へまほ(同)四十思ふらんことのとてく御心

よりゝりてくるゝく覺ゝわびて(堀太)葵「神山のけふれあるのあふひ草こゝ  
ろよりゝるかざりなりけり

心よりなふ(源 末摘)十常よかううらみ聞え給ふを心よりかまぬよをのみ聞えは  
さび侍れ(同 薄雲)九心よりかふわさならぬけとめ聞えんりたか(古)離

「いのちよ心よのかふものからは何りけりかからま

心よりかひせば(拾)戀五よみ「いきかんことれ心にかかひせばふたゝびもの  
おもとざらま

心よりけて(源 維の本)九心よりけていりよとてえ思聞え給へれと

心よたがふ(源 とさき)七露よても心よたがふ事のかくもがなと思へりほどよ

心よつく(源 若紫)卅をりき繪をとおやくひかあそびかとする所よと  
心よつくべき事をの給ふけとひのいとかつりきと云々(同 桐つは)卅かゝづりれ  
たる人とはとゆれと心よもつらおぼえ給ひて云々御心よつくべき御あそびを  
おふかゝおぼいさづく(同 わけまき)六十句へ母こゝろよつたて覺人あら



さこゝまらるらせて例ざまにのどやりよもてあし給へ

心よむせび(万)四冊八「白妙の袖よりるべき日をちりま心よむせびねのみよなりゆ

(源 薄雲)廿 天眼おそろしく思う給へらるゝ心よむせび侍りつゝ

心よのりて(万)十一「東人ののざ泥の箱の荷のをよもいもが心よのりよけるりも

(同)四十五「百敷の大まや人のおほりれど心よのりておもゆるいも(同)七十四「さ

ざなみの志賀津のうらの舟れりよのりよ心つね忘れえせ(同)「百傳ふやその

まをこぐふねよのりよ心よすれかねつも(同)十一「この川のせまのまきを

しくくよいもが心よのりよけるりも(同)十三「春さればあざり柳のどをよも

いもがこゝろよのりよける哉(六)一(後)秋「秋ぎりれさつのこまをひく時ハこ

ころよれりて人ぞこひき(六)四(伊勢集)「面りけり水よつけてもえせやハ心

よのりてこがれしものを(同)(同)「心よのりてこひきあふてふ名ハいたづ

らよみつりやもせで(伊勢集)(後)離別ふねよてものへまわりける人よつりよける

「おくきせぞ心よのりてこがるべきなまよもとめよ舟ハえせとも(家)

心よく(源 帚木)九さてさもたるゝ女のためも心よくおしそりらるゝあり(同)

東屋一。媒詞 人がらハいとやんこどかく覺え心よくおせはるきとかりけを(同)

橋ひめ(二)姫君ハ大君 心をせしづりよよあるりよよてさる目もてあしもけさかく

心よくきさまぞし給へる(う)つは樓の上下六いとあてよけそひかとも式部卿のきと

よりも心よくおづりよにものし給へり(源 桐つや)十六あのみやりにこゝろよく

さかぎりの女房四五人さふらハせ給ひて(伊勢物)廿三段えとめこそこゝろよくも

つくりけれ今ハうちとけて(空穂 嵯峨の院)七十右のおとゞせを心よくたさづり

きものゝ心ある人よし給ふ(源 末つむ)廿一心にくゝもてあしてやまかんとおもへり

しことを(榮 哥合)十哥ハ何よりたたるぞかと心よくきやとよ(源 あふひ)四十少納

言がもてあし心もとなれところかく心よくいとと給ふ

心よまらせ(源 帚木)五木のみちのさくその万のものを心よまらせてつくり出すも

(同)六目よみえぬ鬼の顔をどのおどろくしつくりさるものハ心よまらせてひ

ときは人のめぞおどろりして

心よこそあらめ(更級日記)はらちらある人ハいひもらさてさ兒どもの親ある人

ハいりよもく心よこそあらめとていふよとさぐひて出よつる心よもあされ

かり

心よこめて(源 はし姫)四十心よこめてよろづよおもひる給へり



心はあそぬ(枕)十二猶つねよものかたりうよの中心はあそぬ心ちして(狭)三ノ  
たどひ心はあそぬともむなしいそけおく心のまゝあるべき人つりふべきほどよも  
おとせせ

心はあまる(源)さわらひ(四)心はあまることをも又たれにりのかたらんとおぞし  
わびて

心はゆるむ(源)夕霧(五)十かの御心はゆるし給せん事のかたけなめり

心はいたがふ(源)ゆふのは(一)卅よかりありつきといそせ御心はいたがへるもの

心はしみ(源)夕顔(四)十あどさし心はしみとてあそれとおぞえたまひん

心はしみて(六帖)(古)(貫之集)十一「わりれてふこといろいろよもあらかくは心は

とてわびしかるらん

補心はもつ(万)十五「あし引の山路こえむとむる君を心はもちてやすけくもあし

心はもあらて(伊勢物)三十昔男心はもあらでさえさる人のもとよ「玉のをあそ

をよよりてむせればたえてのちもあそんとぞおもふ(源)あき(四)廿御ぞをすゑ

おきてるさりの死給ふに心はもあらせ御ぐしのとりにへられたりければ

心はそし(伊勢物)九ものころをそし(源)末つむ(三)いみとうかしづき給ひし御む

すめころをそくでのこり給へると(同)夕顔(三)廿ころをそくとて物おそろしうす  
て及よおもひたれば(同)桐つは(三)ことあるときにあそより所あく心はそけかり

(同)廿ころをそくさまよおそしまはし(同)帯木(三)十あへかくころをそければ(補)

(赤染集)「心はそたれり烟とあるからんさるりにゆる野へのともし火(万代)一(雜)

躬「よぶこどり春れむあしくす死ゆけを心はそかる音をもかくら

心へたてん(源)むら(上)五さの給せんをころへどてんもあいかしとおぞはかり

けり

ころと(源)胡蝶(八)いとつゝましう心とあられ奉らんことのかさるるべうおぞは

(六帖)五「やれといそん我後みんなおもおそせ心ともきてさよよけあらん(伊勢

集)十「風さへももてさわぐらあさくら花ころとどよもちるままりせて(同)四十

長哥 山彦のこたふさりをささしして心とつねのゆくふねのそよあけてこそうら

みられけれ(元真集)二十風にのみおそせつれともさくら花とふのころとちりそて

ぬべし(源)帯木(十)廿ころとのおもひたることなくふりきいさりあらん(同)

すま(十)物おもひなくてわれも人もすそ給ひつべかりける世を心とおぞしあけ

けるを(同)とどめ(二)四十御心とい忘れ給ふまどきこそいとされもしけれ



補こゝろと(万)廿七、いでたゝむちからをかみとこもりゐて君よこふるよ許己呂  
度母奈思

心とゞむ(源 帚木) 二 みるべ死ぬの常より心とゞめたる色あひいざまいとあらま  
ほしくて(同) 卅 せんさいかどこゝろとゞめてうゑとり

こゝろとり 機嫌ナトル也(源 寄生) 四十 さいもいつをりよおぞしつべきよけいどけ  
うまべり道草もまこしうちをらひせ侍らんくいと心ざりよ聞え給へば(同 松

風) 卅 何やりやと御心とり給ふほど日さけぬ(同 帚木) 卅 六 やまとかせしをばさ  
しおきてまづちりをたよとおやの心をとる(同 薄標) 七 くりこの御こゝろとり給ふ  
不どよ

○心をとる(金葉) 戀下よみ 一 ぬを人といふもこととりさよ中よ君が心をとりまき  
たれば

心とまる(源 空蟬) 九 御こゝろとまるべきゆゑもな死心ちして(同 花の宴) 七 云々な  
どよろづよおもふも心のとまるあるべし(同 桐つほ) 卅 ありがた死りたち人よあんな

と奏しけるよまことよやと御心とまりて(同 帚木) 五 十 かゝるよつけてこそ心もとま  
まどうつのおぞしなから(拾員) 下 一 あまをおねやゝたづさむるあゝの葉よこゝろ

もとまるけさの雪りか(同 帚木) 八 おもふよりさぐへる事あんあやしく心とまるこ  
さがるべき(同) 卅 時々かくろへと侍りし程のこよかく心とまり侍き

心とけ(源 わの紫) 卅 心もとけぞうとくもづりしきものよおもふして(同 空蟬) 七 心  
とけたるいざよねられをかん(拾) 八 戀下よみ 一 君こふるなまどのこほる冬のよのこ

ころとけさるいやねらるゝ

心ときめ死(源 藤の裏葉) 五 まちりけ給へるも心と死め死せられて(同 椎の本) 八 御  
ふまのつねよありけり宮もかは聞え給へとざとけさうごちてもよてあさト中々心

ときめ死よもなりぬべし(枕) 卅 心ときめ死するもの、雀のこがひ、兒あそびはる  
所のまへわたりさる、よ死さき物たきてひとりふいさる(源 わけまき) 卅 七 中納言の

ひとりふし給へるをさる心しるるよやどうれしくてこゝろと死めきし給ふ(同 東  
屋) 五十 九 いひしらむかをりくれればかうかりけりとされもく心と死めきしつべき

御けそひせりしけきバ(同 手習) 卅 三 なまりたひかることをかくなん聞え給といふよ  
心ときめ死して(同 さるき) 初 よの人もきこえあつりひ宮の内よも心と死めきせし

を(同 あさのほ) 十 もの哀なる御けしきを心ときめ死よおもひてわりやぐ(うつす  
樓の上) 五 宮み給ひていどうれしとおぞさる詞あやしの心と死めきやとて打おき給



ひつ(空穂 國讓)上ノ。實忠ガ子ノ山里ニ居ルニ祖 此侍る人よもおもれ御ぶくをま  
そさせ侍るべりりけれ心と死め死のやうかれどもとてお死よびいろの御ぞひとか  
さねくろつるをみの御こうちきうちいで、見せ奉り給へり(狹)かうよもの風  
よふ死からさるゝぞ心と死めさせらるゝ(枕)ノ二二條のおほぢよちぢたて、物見  
ぐるまのやうよてさちからべたるいとをり一人もささるらんりよと心ときめ死せ  
らる(狹)上三、心と死めさせりりたえ侍ら(同)下四、云々とかきつけさせ給ひて見と  
がむべき御筆れをさみよはあらざめれおおもふわが心よ何事りいところと死  
め死してかきて侍るぞとて(源 やとり木)四、めづらしくうれしきよ心と死めきも  
ぬべ

**心と一** **き** **け** (源 空蟬) 四、さうちさて、けちさはいたりこゝろとけよみえて(同 葵)  
七十こゝろときものよてふとおもひよりぬ(同 くてふ) 九、あかこゝろと、おぢいて

**心ども** (源 玉葛) 九、ものいとあされかるおゝろどもよよろづおもひつゞけられて  
**心ちる** (源 わのき) 六、おほことさらけ作り合せたるやうなるそらのけしき花のつゆ

もいろく月うつろひ心ちりて  
**心をい** **い** 致心(發心集) 二、心をいして本尊にいのりこふ(狹) 上六、ひとつこゝろ

よいのり申べきよなくくゝの給へば皆驚きつゝ心ぞいたいのり給ひながらも  
(源 夕きり) 八、く何がが心をいたしてつろうまつる御を法よ志るよなれやうの  
あらん(平家) 十一、こゝろをいして大ひつゆを成就せば鬼神退散して安樂よ生せ  
ん(語證錄) 十五、念佛申よ、云々心をいたして申せばまゐることあり  
**心とらとむ** (宇治拾) 十三、道心のおこりければよく心をうさめんとてかゝる希有の  
事をしてとけるあり

**心をう** **く** (源 わのき) 下五、から猫の云々心をうく人なれたるのあやしくなつり  
きものよあんまべるをぞ

**心をた** **て** (源 若菜) 上十五、このむらたきもよとられぬる後心をさて、世中よをぐさ  
んこと(同 夕きり) 六十六、かれもいととが心をたて、つようものくゝき人のけそ

ひよひみえ給えねど  
**心をそ** **む** (古) 雜上、近院の右お「いろか」と人やみるらんむりよよりふりきこゝ  
ろよそめてしものを

**補** **心をつ** **ぐる** (新千) 戀三、一、う死人もさはがいそがぬわかれぢよ心をつぐるかねの  
おどろか







りあた心をあそせて

心をさかく(源 東屋)十あこの御けさう人をうばんと給ひけるがおほけかく心

をさなきあと(同 玉葛)五心をさなくもかへりみせで出さけるりかと

心をさむ(源 帚木)七トねんよ心をさめらるゝやうよあん侍り(同 桐つほ)十かう

打ててられて心とさめんかたあき(同)六心をさめさりけるを御らんとゆるを

べ(同 帚木)八此よくきりた一つあん心をさめ侍り(空穂 嗟 暇院)五十御ぐ

おろしてさりぬべりらぬ所よあもりぬよ一かなと覺せと只今のあゝろとさめぬや

うなりとおおは(同 國讓)中一今よりのあやりの人の心ゆりおおもふべからんよと

の給えは心をさめてもの給へさてたひらりよ世よあれとおもほせとりき給へり

(源 之、き)十おろく我心もとる人がらをさまりもをべ

心をみる(源 帚木)二よけりくれて人をまごせし心をもとんとするやとよ

心こりう(源 玉葛)五心こりうおせし物をあゝるをちをもとせ奉るものよもがな

心わきて(源 蓬生)四只今の兵部卿の宮の御娘より外よ心わけ給ふりたもかりけ

り(同 みをつ)三よさびよても心をわけ給ひけんよとたゞからおおもひつゞけ

らきて(六帖)六上「うすくこく色ぞとえけるさくの花露やこゝろをわきておくら

ん(大和物)二のへし「花の色をこてもしをかんもつしもの心わきていおろとぞ

おもふ

心かろく(源 権の本)卅おろざりてとあとの給ふわりの心ろうてなびきやすあ

るなどを(同 初音)五こゝろろき人のつらさよてわれよをむきたまひをまゝら

(六帖)四(伊勢物)廿一いでいをかを心ろうといひやせんよのありさまを人へ

らきて(ねバ)後(戀 四三條 右大臣)「最上川ふりきよあへせいなおねの心ろくもかへ

るあるりか

心がそり(多武峯少將物語)かいらそれとの給ひけりいとあさましくてせんトの

きとかとかくへの給ふ御心がそりや給へるとの給ふまよあき給ふ正氣ナヲマ 狂氣ヲ給ハ

ルカト(源 幻)七かく心がそり給へるやうよ人のいひつとふべきころほひをたま

思ひのどめてこそいと(細 愁傷の心も平生)同(浮舟)卅いりある人の心がそりをと

からひておとはゝるみて

心りそる(續千)秋下「老ぬればむろりもあがめぬを心がそりと月や思はん

(新千)戀三藤原基名「いつそりのなきよありともうき人の心がそりのえやいたのまん

心りそり(源 是、き)二のびて心りそせる人ぞありたら



心グへ我心ト人ノ心ト也 (古) 戀一よみ「心グへするものよもがた戀ハくるよきもの人よーらせん(新續古) 春下「ちる花のをしさをしをさせをやこころグへせよとる此やま風 俊成

心くら(御堂關白集)「いろいろはきか死はのりけれをぞこの心からよや色ハまはらん

心りくる(源空蟬) 四もやの中柱よをさめる人やわが心がくると先めとぐめ給へハ

○心グけさる(枕) 十二病女ノ病スルイといと布しきわざりを例もろくやややミ 給ふなと事をしひよとふ人もあり心グけたる人のまことよいとどとおもひをたき

(後) 春年をへてこころけたる女のことしをりりをさよまちくらせといひたるが

(源末摘) 九 中務の君云々 頭の君心グけさるをもてまかれて

心グまへ(源若紫) 六のこりのよまひふべき心グまへもよなくおたりけり(同夕霧)

六十 ことさらよこころうき御こころがまへありと又いひりへしうらまたまひつゝ

(狭) 廿四 つれをの御心グまへやと思ふも憎くあらで打たれけり(源みをつくし)

卅 ささりりの心グまへもまねび侍るよ世の人やいりよとこそまわり侍れかと聞え給ひて

心りこく(源さあき) 卅 此子もいとをさかし心より外まちりもせむらうと

物(六十) 心りこくやあらざりねんそりあき人のことよつきて人のくまかりける人

まつりされて

心よりほりよ(源帚木) 四十 此子もいとをさかし心より外まちりもせむらうと

き名さへどりをへん(同あふひ) 卅 かく心より外まわりよきものおもひをして

(同あふひ) 卅 心より外あるをほざりてとて(同蓬生) 十 心よりほりよいでさちて

(同柏木) 廿 心より外なる命あればたえぬ契うらめしうて

心よりあまる(源はし姫) 卅 御心よりあまりておぞしなる時々

心よる(重之集) 十一 最上川たれのいらいとくる人の心よらぬあらとぞおもふ

心よわく(元眞集) 廿 (風雅) 一 わるやとをさしばかりのいのおるよ心よわきの

涙かりけり(重之集) 十 (玉葉) 四 「あをれをばたらととおもへどむしのねにこころ

よわくもかりぬべき哉(六帖) 四 「こひいとないをトと思ふよきのふけふ心よわく

もかりまけるりか(古) 戀 五 「つれを死を今にこひとおもへどもこころよわくもお

つるなとどり(源桐壺) 十 かつの人も心よわく見奉るらんとおぞしつゝまぬよも

あらぬ御けしきの(同あふひ) 七 さはがまつら死人の御まへわたりのまさるよも心



よこしや(同 あさのほ)十 心ことよけさうゆくら入給へればいと心よこからん人

のいりべととえたりナヒキヤスキチイワカ人心の心よけさうゆくら入給へればいと心よこからん人

心よそひ(枕)十六 女房のまゐりまかてまゐるはくるまをかる折もあるは心よそひ

いたる顔よりあひひてかしたるは牛のひららの例の牛よりもあもさまは打ひ

ていたうのしをうつもあやうたてとおやゆりしは心よそひ

心よく(源 帚木)四 是こしとをやさてあんこのづいも心よくひらくべきとの給へば

みかあ(新續古)清輔「うけぎぬのいりよるともて入るはくよりあふべくもえぬま

みかあ(源 わかな)下七 物ノおもふどちのものかさりのついでに心よから

心よけ(土佐日記)上 心よけあることして出はけりしは心よけ

心よき(源 玉葛)初 右近ガ 心よけいひをめさる物に女君もおほしたれば(同)卅

彼親かりし人の心かんありがさ死までよりり

心よせ(体ノ語ナリ)九 さらぬ上達部もやんごとなくおやえあるをえらせ給

へりるんの御こゝろよせもあればあるべし(同 さわらび)四 例の御心よせある梅の

りをめでおさけるを白宮の梅蘭をめで給ふよし前(同 竹川)卅 さらき折し心よせ給ひし

でりし(同 すま)廿 國のりともあたらしきとの人なれば志のびて心よせつらうまつる

せあるやうに聞ゆる内にてさしてよりらんとおやして大將をなしたまふ(同 樓の

上)下云々 としてをやくりの御りたし心よせよてありし大和のまけある人をめし

で奉り給ふ(源 桐つは)廿 さらき花もみぢにつけても心ざしをえ奉りこよな

う心よせ聞え給へれば(同 をとめ)十 弘徽殿のまづ人よりさらし参り給ひしは

あぶかどうちくしこかさかあさし心よせ聞ゆる人々おやつらかり聞ゆ(同 藤

のうら葉)廿 さいの上の紫ノ上御ありさまのまをてがたきしは中宮紫ノ上ノおさ

ませばおろりならぬ御こゝろよせあり(同 浮舟)五十 人ふさりと侍りしを云々女

今のりたし少し心よせまさりてぞ侍ける(宇治拾)一 このちで心よせまきけり

心よよける(源 あけまさ)卅 一霧ふりきあしこれらのをまかへし心よよせて

る人ぞとる(同 薄雲)卅 女御の秋し心をよせ給へりしは

こゝろとがふ(源 總角)五十 これも人もみおとさき心たがひでやみよしがあと

心たがひ(源 楨柱)十 北ノ方 例の御心たがひよくるしき事もいぞこん(同)六



心さぐひとはいひながら猶めづらうみいらぬ人の御ありさまなりやとつまそと  
させられ

心たけり(源わの紫)六こゝろたりさくるしやとてとらふ(同 繪合)三兵衛の大君の  
こゝろたりさのたますてがさけきと

心どつ(源若菜)上。朱雀院ノいよく御心たせ給ひてまづりの弁してぞりつと

源氏あかいつとへ聞えさせ給ひける(狹)三上。今姫の母代アス。母代誠やおもひ

りけぬ人の御ふみをもちて侍りてがあといへを大將おぞろけよてのちらさぬもの

をよ侍らとどの給へば母代たよのつねの御こといみえ侍らざりきと地思ひ

せ心たつが大將にくけれ詞云源こてふ三わざとふるからで花蝶よつけさる

たよりごと心ねたうもてあいさる中々心どつやうにもあり(同 やとり木)六十 猶

をかたさまよ心もたへ五

**補**心たらひ(万)十八「このとめる雲をびこりてとのぐもり雨もふらぬりこゝろた  
らひよ

心たまりひ(源柳)廿人わろくこひうりなきよ心どまりひもうせよけるよやあ

やまうさへおぞさる(同 あらし)五のをもえあがりてらうのやけぬ心どまりひ

なくてあるかぎりまどふ(うつろ 國ゆつり)十一五心どまりひをまどそりさせ給ふも  
のりか

心そら(源ゆふのは)卅またこれもいりならんと心そらよてとらへ給へり

○心いそら(伊勢物)六十野よありと心いそらよて(拾)春 讀人「ももてて行と

思へばちる花よつけて心のそらよあるりか(万)十二「さちるするたどれもいらせ

我心天つそらかり土いふめども(同)十二「とぎもてが夜戸出のすがたみてしより

心そらかり土いふめども(同)十七「立とまりゆきとのさとよいもをおきて心そら

かり土いふめども

○心もそら(源夕霧)五心もそらにて(同)八「山がつのまがきをこめてたつきりも

心そらある人のとめめ

心そむ(源あけまさ)卅「山ひめのそむるこゝろわかねともうつろふりたやふ

りたあるらむ(同)卅とよくりくよ心をそめけんごよくやしく

心づら(伊勢集)五「りけていへば涙の川のせをそやみ心づららや又いな

がれん(後)春下「風をたよまちてぞ花のちりをましこゝろづららようつろふがう

さ(同)秋下「とてとよ雲路まどそぬかりがねのこゝろづららやあきをしるらん



(古) 春下藤原「春風のそをれあたりをよきてふけこゝろづからやうつろふととん  
よしりせ (源花散里) 初 人しきぬ御心づりらのものおもほしきん(中務集)「こひしきも心づ

りらのことおれおきとところなくもてぞつらふ(源玉のち) 上ノ心づりらの  
びわさしいでとるかん(續千) 春下よみ「たをりてもおろうつろさば櫻花こゝろ  
人しらす 十五

づりらのうさやわはれん(同) 伏見院「うつろふも心づりら花からばさをふあら  
しをいかゞうらとん(新千) 戀三「たのみつゝまことをおたゞ偽のあるよもあらぬ  
心づりらよ(同) 同「行末のこゝろづりらよ成よけりさはがこのみをかくるちぎ

り  
心づりふ(源をとめ) 四十男の口をしき死のの人とまこゝろをたうこそつりふお  
れ(竹取) 四相戦とんととるとも彼國の人さをさけさこゝろつりふ人もよもあら  
ト(源すま) 四十かく女の心とたりうつりふべきものなり(同梅うえ) 廿まきと

き心づりとるか(同) 七人ときろひをねむ心づりひ給ふか  
○心づりそと(源玉のち) 六更よまきとしき心のつりんとかんおもひしを  
(空穂 國讓) 下 廿七今より我よあらせぬ心をつりけれそ

心づりひ(空穂 初秋) 下 十五。基ノねさうまけ奉りぬるうかこゝろづりひしてつりう  
まつらましを(同 國讓) 上上達部常よものし給とぬ所をれ御心づりひつゝまうで  
給ふ(枕) 三粥杖ノ打れトと用意して常よりろを心づりひしとるけしきもをりし  
きよ云々(和泉式部集) 下 廿「關こえてけふいとふとや人のいるおもひとえせぬこ

ころづりひを(源あらし) 廿此うらよ住ととめしとどの心づりひ後の世をつとむる  
さまりきくづり聞えて(仲文集) 七花の枝よふみのあるをえて「春此とふこゝろづ  
りひをたづぬれば花のたよりよこてふありけり(忠見集) 十「いづくよりたづぬも  
あそん身をさけて君がゆるさぬ心づりひを(源桐つは) 六かゝるをりよもあるまト

きもちもこそと心づりひしてみことをばとめ奉りて(同) 三おそやけまつりう  
まつり給ふべき御心づりひ此宮の御うしろみしたまふべきと(後拾) 雜五入道前  
「わりあつむりすがれもらよ雪ふればあゝろづりひをけふさへぞやる  
心づよく(うつや) あて宮 七アテ宮 参内 かく参り給ひぬとも限りと思とと心づようお

もひて(源桐つは) 廿九心づようねんとりへさせ給ふ(同 夕顔) 廿九南殿の鬼れ某のおと  
どをおびやうけるさめしをおぞいので心づよく(兼盛集) 三拾 戀「そちのく  
れあどちの原れあらま弓心づよくもそゆる君をか(源藤のうらと) 初おとゞもさこ

そ心づよがり給ひしとたけりらぬよおぞいとづらひて(同 末摘) 初つれかうあゝ



ろづよきいさといべかう情おくる、まめやりさかど云々

心づくろひ(狭)十七心ことかるべき夜の御あそびと心つくろひ一つゝとみよも

手もふれ給とて(同)十各心つくろひいたくして引いでたるもの、ねどもいとおも

いろ(同)三十一中みりりゲるまうらまきこえ給いせ心つくろひもあまりくる一

き折ハ

心づく一(源)もふらは一十人やりからせ心づく一はおもほしとどる、ことゞもあり

て(同)帝木初あかがちよひきこがへこゝろづく一かる事を御心はおもろ一とゞむ

るくせあんあやよくよて補(古)秋上よみ「木のまよりもりくる月のうぐみれば心

づく一の秋のきよけり(續千)戀三宰「ちらせをやとむるよひのまつのとよ更行

月のこゝろづく一を(同)宣時「まちとぶる心づく一のをとをどよみせをよよれ

月ぞふけゆく(新葉)離讚岐國松山といふ所よつきて月日をおくり侍り一入道大

納言爲世がもとより松山へ心づく一ありとても名をのたまへてとぬぞかあ一さ

と申おくりて侍り一返事よ中務卿宗良親王「おもひやる心づく一もりひをきよ人

まつ山とよ一やきりぞト

○心をつく一(源)桐つほ五ひまかさ御まへとゞりに人の御心をつく一給ふも一よ

こととりとみえたり(同)末つむ卅心をつく一てよといで給へらんほせをおせ一よ

心つけ(源)あふひ九四十とく一けとの、猶此大將よのみこゝろつと給へるを(伊勢

物)十あてある人に心つけ一りける

○心をつく(拾)春齋宮内侍(六帖)(貫之集)「春の田を人にまりせて我いたゞ花よこ

ころをつくるころりか(六帖)上、「音よきく人よこゝろをつくさねのさねもおも

ふおもさんやきと

○心をつくる(古)戀一元方「たよりよあらぬおもひのあや一まのこゝろを人よつく

るかりけり

心づき一オモヒツク(後)戀二人の家より物見よいづる車をとて心づきよ覺え侍りけ

れハ云々

心づきて(源)東屋十いときやうざくよつりうまつらまろ一と心づきておもひ聞え

いろと(同)若紫一十明くれのあぐさみにもとせやとおもふ心ふりうつきぬ

○心づき一スガナイ、オモヒツク(枕)十二心づきなき物ものへゆき寺へもまうつる日の

雨、つりふ人の我をおせささあまが一こそ只今の人あといふをなけき、たるこゝろ

あ一き人のや一かひたるさるのそれがつまよあらぬとゝゝる人よ一もとおせゆ



るゆゑよやあらん(源 帚木)七物ゑんトをいさく侍りくバこゝろづきかう(同 空蟬)初君ハウツセ心づきかゝとの覺(同 夕顔)ががら(同 夕顔)四十(同 夕顔)くこく人よなびりぬいとこゝろづきなきわさなり(同 帚木)十つねのすまゝそいしく心づきかき人の折ふしつつけていでをえさるやうもありりかど(補 大和物)三さて心づきかゝとや覺しんもとの宮になんこたり給ひよける(著聞)十打まりせていこゝろづきかりりぬべきよ

こゝろね(和泉式部集)下「こゝろねのほどをえさるぞあやめ草くさのゆりりにひきかねども(補 實國卿集)一つめどもえぬよひけるあやめ草がこゝろねぞあらそれよける

心かぐら(源 帚木)廿うらめしとおもふこともあらんと心かぐらおぢゆるをりくもそべりしを

心かぐき(六帖)一(伊勢集)十。七夕「朝またさいをぎひくらんけふのをよ心かぐさをくらべてしげな(後)戀四「きをとおもふこゝろかぐさの秋のよいづれまさるとそらよいらかん(源 末摘)二我さりとも心かぐらみもてんと覺しか(同 葵)七心かぐき人よあらさとして給ひあんものを

心からぬ(狭)四ノ上盗まれたらんいりやうある人からん心ならぬことならいりさりりこびりかるらん(千載)冬「岩こゆるあら磯あまたつちさり心からぬやうらづたふらん(後)戀三あひりて侍ける女の心ならぬやうよえければ

心からひ(源 夕顔)卅りのさしつとひたるをまひのこゝろならひからんとをりくおぢ(同)四十とづらそりくくすくよりならぬ心からひ(同 あふひ)四十

「あきたまぞいと悲しきねしとこのあくがれがさき心からひ(千載)釋教前大僧正覺忠かへりてもいりぞとづらふ槓の戸をまどひ出よこゝろからひ(源 蓬生)廿ま

たりそらぬ心ならひ(抄 薄雲)同(をどめ)卅。源わが御心ならひいりよおぢにりありけんうとくしけき(夕 霧)紫上繼母

心なく(万)十九、そこゆゑは情奈具也等秋つけ(云々)

心なく(万)十八、あひくらんてゝろあぐさよほとぎはきかくさつきの(同)

廿四「とぎもこが心かぐさはやらんため沖つしまる白玉もがも(同)廿九いぶせ

みと心なくさよあでしことをやどよまさおほ(同)十九、そこゆゑよこゝろなぐさ

心かさけある(情ア)伊勢物(六十)むりし世心づける女いりで心なさけあらん男よあ



ひえていぐおとおもへど

心なきみ (いねぬ) さまとりのとりどもあまのすさきよむらがれてかくもこゝ

ろあき身よあそれかることかぎりなく (新古) 秋上「こゝろなき身よあそれの

忘れぬりいぎたつ澤の秋のゆふぐれ

心か (源紅葉賀) 廿こゝろなけよいおけてきこゆるのかとさふらふ人々もきこえ

あへり (同帚木) 卅かうしをあけたりければ守こゝろかすとむづりておろしつれ

バ (同若紫) 九雀の子をいぬきがよがいつる云々例の心かしのりゝるをさをしてさ

いあまるこそいとこゝろづきかけ (千載) 隆季「すむ水を心かしのたれりい

ふこなりぞふゆのそとめをもる (朗詠) 誰謂水無心濃艶臨兮波變色 (源末摘) 卅わ

れさへ心なきやうよといとむづりて

○何の心もかく (オモヒモツ) (竹取) 十二何の暇り心もなく侍らんよふと御ゆき

て御らんせられかんと奏をれば

心むけ (源野分) 十やうくゝる御心むけこそをひまけれ (同あらし) 十時世のり

せいま一さたまさるひとよのあびきいたがひてそのこゝろむけをたどるべきあり

(同こてふ) 十一ひとへは打とけたのを聞え給ふ心むけをさうたけよわりやうかる

心得 姑心えノ 所お出ス

心う 心愛 (源若紫) 四十おをろしとおもひさればあか心うまるもおかト人ぞとてり

きいどきて出給へバ (同) 廿心うくもの給ひをそりか 云々 (同もみぢの賀) 三わりき

女房などの心うしと耳とめけり (伊勢物) 廿三心うがりていりせかりよけり (源

若紫) 廿七さてよこゝろみかんとふりくおぞしたるよ心うくていさなき御けしきか

るものりら

心うつく (伊勢物) 廿二人がらこゝろうつくしうあてそりかる事をこのみて (瀧

松) 四十雪の山の人さをひいで給はん事此宮のひんがしの對などよりぬべく女君

よも 尼姫 心うつくしう有さまりより聞えて 姫君 ひとつ心に覺いぬべき 云 (源初音)

三皮ぎぬとさへとられよ後さむく侍ると聞え給ふいと鼻ありき御せうとあり

けり心うつくしといひあがらあまりうちとけ過たりとおぞせと (花心ニオモフナ

心ウツクナリ) (同末つむ) 廿 ちやいでさせ給へあぢきあし心うつくしき事をしへ

きこゆをを (同紅葉賀) 十内より大殿よまりで給へり例のうるもしうよそをしき御

さまよて心うつくしき御けしきもかくくるしければ (同) 六こゝろうつくしう例の

人のやうよろらみの給へバ (同常夏) 七人にくこゝろうつくしうのあらぬささあ



り(空穂 吹上)廿二 あざり宮あこぎみは心うつくくくさらひての給ふ(同 藏開)五上

三 更よさる御けしきもかくこゝろうつくくかん(万)廿四 「たちをあのこべのそ

かりがおもふあん心うつくくいであれいりな(源 竹川)廿四 「とふぞゝるそらをあがむるけしきまで花にこゝろをうつす

けりともし(源 さあき)六 やうく今のおもひをなれ給へるまさればよとありく

心うてきておぼしとたる(同 紅葉賀)卅一 ときでんいとゞ御心うてき給ふこととりな

り(同 あふひ)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

を(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

心(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

心(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

心(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

心(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

心(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

心(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

心(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

心(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

心(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

心(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける

心(同 螢)十 せりなりりところの車あらそひま人の御こゝろのうてきよける



**補**心のさま(夫)玉季能一月とればやがて袂のぬるゝりか心のさまや水をとりらん  
心のそら(源 行幸)八八よるひる三條よさふらひ給ひてころのそらかうものゝさま  
ひて

心のそこ(風雅)雜下重能一人のちらとりた山陰のうもれ水心のそこいりよをむとも  
**(千載)**雜中圓位法師「ありつきれ嵐またぐ鐘の音をころの底よこへてぞまく(源  
わの奇)下冊四もてかゝをさけしきをむづりくころの底ゆりしきさまして

心のつき(續千)釋教基俊「紫のくもれおりの山里に心の月やへたてあるらむ(詞花)  
雜下「いりてごごころの月をあらわしてやみままとへる人をてらさん  
顯輔

心のつと(罪)落く罪一文詞いつりて参りこんとつるをどまかうわりありめれ  
ばかん心の罪よあねどおろりよおもほはかどて

心のか(源)やとり木八十心のかよやあらん今をこいおもくくやんでとを  
けかるけしきさへそひよたりとみゆ(同)あけま九四十わが身よていまどいとあれ  
がほどよのあらせ目もをまほしと覺ゆる心のかよやあらん(同)紅葉賀九  
云猶たがひあらとと思ひ聞えし心のかよやありけん補鈴屋翁も玉勝間十六よふ  
るきものよも見えたる事をき心のかよやをつりからせとかれたり

心のうち(源)玉葛初心のうちよ古君物し給たまらば明石の御方をりりのおぞ  
えよのおどり給のざらま

心のうら(古)戀四戀六五上「忘れかんものどいかねておもひよき心のうらぞまさか  
りける(源 薄雲)五さりしき人の心のうらともよものどいせなぞするよも補(續  
後拾戀三よみ「さりともと思ふこよひも更行心のうらや又たがふらん

心のおよ(源)ととめ冊一内のおとゞの御車のあれを心の鬼よとさかくてやをらり  
くれて(同)蜻蛉四十ルカチ心わがけしき例からせと心の鬼よかけきづみてるさり  
けん有さまと聞給ひしと思ひ出られつ(同)横笛七も宮の御心の鬼よと思ひよ  
せ給ふらんと(夫)冊六「とまかくよ心の鬼の目よをへておそろしき世よふるぞか  
かしき(枕)七「たそらいたく心の鬼いで来ていひよくかん(源 紅葉賀)十宮の御

心の鬼よいとくるしう(紫式部集)「かき人よかごとをりけてわづらふもおのがこ  
ころの鬼よやのあらぬ(謙徳公集)「わがさめようときころのつくからよりつひ  
心の鬼のええけり(列子)林希逸注疑心生暗鬼

心のおく(奥)伊勢物十五「おのぶ山一のびてかよふみちもが人のこころのおく  
もみるべく(源 柏木)四十三此宮こそ聞よりいころのおく見え給へ



心のおきて(源 夢浮橋)十むりよりふかゝりよりこの心おきてりたり給ふ

心のおもむけ(源 手習)十六今にかゝるうたよおもひりぎりつるありさまよかん心のおもむけもさのを見え侍るを

心(源 大和物)二「おまよこそまうせたりけれさうかくも心のくるとおもひけるうな

心(源 わけまき)八つゝと給ふ御心のくま残らせもてかゝ給せんあんな

心(源 狭)四十二中女宮も年比にあさましく見まうき心とおぞかからさげま

其事ととりたてゝあめ夕よとえ聞ゆることもおければさゞこのくせよこそ身

身こそつらけれと覺しゑりて人のつらさへとがむまよきよおぞめつるを(狭)

四十八中又あべて世づりぬ心のくせとも覺しやをらんと思ふ方もかぐさめられ

心(源 松風)五心のやみそれまかくかたきこたりとべりまよ(同 桐壺)十

これもこりあきこゝろのやみよかんといひもやらせ(後)兼盛一「人の親の心ハや

よあらねども子をおもふとちよまよひぬるうな(源 若菜)上七「世をきてゝあり

れうらよむ人もこゝろのやみのるけしもせト(千載)戀五「君こふるこゝろの

やをわびつゝ此世さうりと思まうりバ(古)戀三「かきくらはこゝろのやを

よまよひよきゆめうつゝと世人さざめよ(補 新古)戀四「あわれある心れやとの

ゆりりともよよのゆめとたれりさざめん

心(源 わけまき)十きくこれ心のやをらひさへあやしく覺え給へど

心(源 蜻蛉)七かくこゝろのまどひにひがくゝくひつゞけらるゝあめ

り

心(源 帯木)廿四御心のまよをらばおちぬべき萩の露ひろさきえかんと

ゆる(同 花の宴)九ありぬ所なうとが御心のまよをへなさんとおぞはにかあひ

ぬべ(同 夕顔)五心のまよとふらひまうづることあけれど

心(源 後)戀五よみ「いつまでのそりあき人のことのもり心の秋の風をまつら

ん(源 横笛)七これも心のくせよいとちうおぞさるれば(古)戀五よみ「あぐれつ

つもみづるよりも言のまれ心れ秋よあふぞとびし(新葉)戀四讀「かそりゆくこ

どのまよをいろみえぬこゝろの秋もまづしられけれ

心(源 柏木)卅又いとくまなき御心のさがまておしそり給ふよ侍らん

心(源 幻)五宿世のほどもみづからの心れさそのこりかくとて心やす

きよ今なん露のそりかくかりよたるを



心のゆくへ(源すま)六十四をこそりとかくさへづるも心のゆくへのおおとことなる  
りあ

心のとづ(夫)九定家「そちをさくあさりの風もりせりあひてころの水をいませ池  
りあ(新古)釋教五智の心を妙觀察智

りせもみん(詞花)雜下太政大臣「思ひやれ心のとづれあさければかきかたはべきこと  
のともか(新勅)釋教「數らぬちのちをよすむ月を心のとづようついでぞ

とる(續後)釋教「くもりあくむかききそらよすむ月もころの水よどるかりなり  
四ノ句ナルハ(類句)晋書鄭崇傳臣心如水

心のいるべ(源 帚木)四十さふべくもあらぬころのいるべ  
心のいるわさ(元真集)廿一世よもよせものおもふからよくるよきのおのがこ

ろのいわざかりけり  
心のひま(詞花)秋頼綱「あきのよれ月よころのひまぞあき出るよまつと入ををい  
むと

補心のせき(月詣)四頼輔「そいめどもとまらでせぎぬ時鳥ころの關のかひあり  
けり(六百番哥合)有家「夜をうさね心の關のかたきをかとりれハ鳥のそらねから

ねど○瀆臣云後世名所とれるハ誤あるべし

心のすぢ(玉葉)雜三後嵯峨院「さゝがよのくもれふるまひ哀なりこれもころのせぢ  
ハミえつ(源 玉葛)八十たゞ心のすぢをたゞよそいからせもていづめおきてなた

らりならんのとかんめやすりるべかりけるかどの給ひて  
心のせさび(源 あふひ)三三あゝろのすさびよまりせてかくすさわするハいと世の  
もどきおひぬべきあとかりかど(同 稚うも)九九わりくくき人の心のすさびよ

心おとり(瀆松)四六待れ奉らざりける身のおせえこそころおとりをれかどあい  
かくうらみて(源 しのあ)上七いとほしきことども聞え給ひておせいとざるよや  
今のかさりと御位をきとめ給はん世に聞えもあらせんどこを思へくちをいとお

せよつべきよのあらねどいととそくころおとり給ふらんとおせゆ(注)  
又ナキモノニオホシ、御心オゴリモイトホシク心オトリシ玉ハント明石上ノコ、  
口也(空穂 藏開)下一いとみよくき人どもなれば御らんせんくら御心おとりやせん

とむづりくくてなん(枕)十四御前のさくら色のまさらで日かどよあたりておせみ  
ころあるよとびよき雨のよるふりさるつとめていみとうむとくかりいと  
くおきてかきてころれん顔ハ心おとりこそをれといふを(源 しの紫)十三尋させ給ひ

増補新編言集

增補新編言集



ても御心おとりせさせ給べし(枕)十一、二がことをおもてつけていふが心おとりはる事あり

心おそき(源 総角)十 おやつりかくおもひつゝ、すぐは心おそきのおまりをこがまうもあるりかとおもひつゝ、同蓬生)六 ふるうた物語さやうのことよもこゝろおそくものゝ給ふ(同)とし姫)廿 おもひりけぬをせかればおどろりざりけるこゝろおそきよと心もまどひてちぢおそさうせ(補)万)九ノ「常世べますむべきものをつるぎざわがこゝろら於會也このきみ

心おく(拾)戀二「ふたつをきこゝろの君よおきつるを又もどもかく戀しきやあそ

(古)戀二(六帖)「露からぬ心を花よおきそめて風ふくことよものおもひぞつく(後)

戀つれかく見え侍りける人よよみ人「つらうとやいひえて、まゝ白露の人よ心ハ

おろトとおもふを(同)戀二「うゝをける人のこゝろを白露のおける物ともこのこ

とるりあ(源 少女)廿 今さらのよまひの末よ心おきて(元真集)廿「をのこゝろさえ

せおきつる初霜よこゝろをさへもおりせつるりあ(源 帚木)十 されも人もうゝろめ

たく心おられしや(同)四 すすきよめらん女よ心おりせ給へ(古)戀一「立りへり

あそれとぞおもふよをよても人よ心をおきつゝらなと(新拾)戀四「いつまでりあ

ふことりたきあら鷹の手かれぬ中よこゝろおくらん

心おくれ(狹)三、上、う、迄こゝろおくれおもひやりなきわざし出給ふべしといおも

まざりける(同)二、上、あゝろおくれていとわゝりつる事りかさむりけしきとり

給ひてい(源 帚木)廿 よと出たるなりくゝあゝろおくれてみゆ(同 梅のえ)廿 あや

うこゝろおかれてもせゝと出つるなをたりな

心おきて(源 澤標)十一 いたらんともおがえざりつるを此御こゝろおきての少し物

思ひかぐさめらるゝよぞ(同 夢浮橋)十一 むりよりふりゝりゝりこのこゝろおきて

りたり給ふ

心おひ(うつろ 吹上)一 草木などのこゝろおひよおひたるのつたなきものかり人ち

りよてあゝたゆふべ云々(大和物)二 「あさぞらけわが身の庭の霜ながらあよをた

ねよてこゝろおひけん

心おもく(うつろ 國讓)下ノさればこそ云々御心おもくおそしまはしあらぬまいと

ほしき事りかとの給ふ

心くちをく(源 東や)六 かくこゝろくちせくいましける君あれを

心ぐる(鈴屋大人ノ説)源 桐壺)四 此御方の御いさめをのみぞあやとづらひくこ



ころぐるうおもひきこえさせ給ける(同末つむ)五いとわりくうおもひまは

こそ心ぐるうけれ(同帚木)四十ころぐるうのあれとみさらまうりやくちを

からまうとおぢ(同)七十心ぐるうも戀しくも覺つ(同とつね)二十さるおりも織物

の襦ワヂキをき給へるいとさむけよころぐるう(枕)六おももん子と法師まなしたら

んこそいいと心ぐるうりるべけれ(宇治拾)八あの聖のいひけん云々心ぐるうき御

事もなく例さまよらせ給ひぬ(伊勢物)九十心ぐるうとおもひけんやうくあ

それとおもひけり(源とまき)七かくりせからぬ身を見もまたでかかくも

おもふらんと心ぐるうき折々も侍りてねんよ心とさめらるゝやうよかん侍り

(同)廿こよひ人まつらんやどなんあやしくころぐるうきとて(同)廿たあさゆ

ふよもてつけたらんあまさまよみえて心ぐるうかりうりたれめとたることあ

りさり(同わあき)上ノまうて今の心ぐるうき不さしもなくおもひまかれまたら

んをや(空穂樓の上)下ノあゝる所よひとりまかれておせんがまゝろぐるうお

ぢえ給へばかり(同)下ノめのとあるべし云々いと心ぐるう(同)八あそれとゑん宰

相の云々猶これ心ぐるう(万)九「あ引のあら山中よおくりおきてかへらふみ

ねばころぐるうも(竹取)十御つりひ仰ととて翁よいとくいと心ぐるうく物お

もふかるのまことよと仰せ給ふ(伊勢物)四十男きゝていとこゝろぐるうかり

ければ〇與清按心のくるうき事よいへる例多し氣の毒をといふ義のみあらせ

心くどく(源蓬生)初立われ給ひほどの云々人々のいたの心くどきたまふさぐ

ひおなり(同)九かかかり云々ひなき世りかと心くどけて(菅万)下「ひと

たびのこひとおもふま苦きいころぞちまくどくべらある

心くらべ(元真集)廿「かりそめのころくらべよあふこと此命もいらぬことい

らせや(源あらし)卅ころくらべよまけんこそ人わるけれ(狭)一ノ五あまの子と

ごよなのらねばころくらべよて(後拾)雜二「さもこそいころくらべよまね

さらめそやくもみえし駒のあうりか具伎

**補**心ぐき(万)八ノ「ころぐきものよぞありける春霞たをびく時戀の志けきは

(同)四ノ五「情八十「おもゆるり春がはみたなびく時事の通へ(同)廿九

みまつとらこひをかりころ具志いさよゆり(同)卅情具之めぐもあ

(同)四ノ五「春日山霞たを引情具久てれる月夜よひとりもねん(同)廿三「あさぢ

原ちふよあふとこゝろ具美わがもふくらが家のあとりみつ

心やり(土佐日記)下男ぢいの心やりよあらん(重之集)十かりやどりよころれを



ぞしみてゝろとやる(万)十七おもふとちこゝろやらんと駒なめて(六帖)三「いり  
ぞわが心ぞとよもやりてしげとなくあるみのうらとがてら源推本四哥云  
心をやりてのさまへりけり(同)舟のこゝろやりよよめる(風雅)戀四和「水雞どよ  
たゝくおとせばまきの戸を心やりよもあけてきてま泉式部

心やりどころ(狭)四をむ人かくて内とさりいと云々こゝろやり所よも人のおもふ  
(源)五上まつりくめでさき御ありさまをこゝろやりどころよまゐりつりう  
まつり

心やま(源)あふひ七心やまさをばさるものよて(同)八うつ蟬八やうくゝとあら  
ひ給ひて云心やましけれと同八榎柱廿あとりさしもかど心やましうかんなど  
あるを(清正集)「おぞつりかくもれる空此とちかれバ心やましき曉の道(源)帶木

二さしもみ給へざりしことかれど心やましまよよおもひ侍りし(同)九廿あゝろ  
やましきものこゝよてかんあひてまべりし(同)十わかき上大將のあたりがよよ  
かゝる御かりらひようけをりてものし給ふもたよ心やましけなるわざあめれど

心やぶ(源)少女四さやうよあかがちなるさまよ御心やぶりきこえんかどいおぞ  
さざるべし(同)十一タきり六十ものこゝなどよても思ふ事をりきこえて御心やぶる  
べきにもあらせ(空穂)嗟職院五八十後の腹たちてのゝをり給ひて云と手をうちての  
給へバ御心をやぶらトとてえおとしまさせ

心やみ(源)源標初大后なを御あやみおもくおとしまはうちよもつひよ此人をえけ  
たせなりぬるまど心やましおぞしけれと

心やす(源)桐つは三こゝろやまくさとせもし給ねバ(同)はき三人より  
のこゝろやまくかれくゝくふるまひたり(同)六廿心やまくて又とたえ置侍しやど  
(拾)春惠慶「浅茅原ぬしあきやどのさくら花こゝろやまくや風よちるらん(源)夕顔

七いざいと心やすき所よてのぞりよきこえん(同)廿此とさりちりきところよこゝ  
ろやまくてありさん

心やま(山家)上「かきとごる心やまめのこととさのあされくゝとなけくさり  
ぞ(万)八十二「常かくしこふるのくるしおまらくも心やまめむ事さりせよ  
心まとひ(源)桐つは八きこゝめは御心まとひ何でともおぞしめしわりせこもりお  
もしまは(後)戀四よみ人しらす「おもひやるかたもあられせくるしき心まとひのみちよ  
やあるらん(源)ゆふの四見ていきわりれよけりとつらくやおもとんと心ま  
どひの中よも覺とよ(同)帶木一四十ことわりある心まとひを(同)松風十見奉らざら



んこゝろまよひのまづめがたけれど(亭子院有心無心哥合)「織女の思ひけん空も  
おもほへどわりれて後の心まどひよ(新古) 戀四惠 子女王「きのふともけふともあらせ今  
いとてわりれし時の心まどひよ(源竹川) 廿九いとこゝろまよふさうりのおもひいれ  
ざりしりど

**補**心まよひ(續千) 戀三 兼季「のびつゝとゞ時此まよあふ程のこゝろまよひを夢にか  
そらぬ

心まうけ(狹) 廿九 出家御まけのほいとさせ給ひぬべき御心まうけかどせさせ給ふぞ  
(源すま) 九 忘たしうつりうまつる限り御供よ參るべき心まうけして(同紅葉賀)

三宮人も待聞え内よもさる御心まうけどもあるよ **補**(大和物) 五 さる心まうけして  
ゆくりもあくりさいどきて馬よのせて

心まさり(空穂 初秋) 下ノ、北方詞 七十 何事より侍らん心まさりぬべき事よはべるか  
るりか

心けさう(源葵) 九 さまことさらび心けさうしるるかんをりきやうくの見物か  
りける(同末つむ) 十 よよめでられ給ふ御ありさまをゆりきよものよおもひきこえ  
て心けさうしあへり云々さうしと何の心けさうもかくておまは(榮つはみの花)

廿尼上いとときあつらひしきもいみづく心けさうせさせ給て侍きこえさせ給ひ  
(源 槇柱) 十 ありつる老らくの心けさうもよからぬものよれとひとりきし

心ぶと(和名抄) 七 海菜部 大凝菜本朝式云凝海藻古留毛波俗用心太二字云古々呂布  
止

心ふりく(情ノア) 源 空蟬 八軒端 あされさるけしきよて何の心ふりくいとそしき用  
意もか(同 帚木) 十 いと哀よをかしく心ふりき事りかと涙をさへかんおと侍り

(同) 二 心ふりしやかどそめたてられて哀すみぬればやがて尼よかりぬりし  
心でそ(六帖) 五 「まちのくのあぢちの眞弓たむれども心こまきよやまをさりし  
る(源 少女) 四 故宮よもあり心こまきものよおもそれ奉りて(同 手習) 卅九 心こまきさ

まにのいひもなさで(拾) 戀四 よみ 人しらす (兼盛集) 「まちれくのあぢちのまらのあらまゆ  
み心でそくもそゆる君りな(源 夕きり) 十六 あく心でそぬれどいまいせりれ給ふべき

ならねバ(空穂 樓の上) 一ノ、若宮ノ 廿六。事ナ た宮の御まねをしてさがかう心でそくかま  
めりしきけも侍らせ **補**(源 あけまさ) 七十 こゝろでそくおもひぐまかりらとつと  
と給て

心こどよ(源 桐つは) 四 此みこうまれ給ひてのちいところこどにおもほしおま



増補雑言集覽  
卷之四十一

てたれば(同 繪合)二心ことよとのへさせ給へり(同)八そてのまきの心ことよを  
ぐれさるをえりおき給へる(空穂 樓の上)下六かんのとの、御方より心ことよま  
うと給へるかづけ物云々いと清らりようるをく(信明集)卅「よはから風もそ  
ぎくふくころの心ことよてまさとやまる(元真集)八「りさ岡此のべの小松を  
ゆきまより心ことよぞけふひひきつる(狹)下「とりちらは中女さうぞくの心こ  
とあるのあるを何ニテモ勝レテトイフモノ(同)十四上御年も心ことよをりて

こゝろ(詞花)秋和泉「かく虫のひとつ聲よも聞えぬのこゝろよものやう  
かき(源 あふひ)五所々の御さときこゝろよよつくしるつらひ人のそで  
口さへいとときみものあり(同 絵合)十心よくきいうそくともてこゝろよよあ  
らそふ(拾玉)六「あそれよもおかトみどり此春草のこゝろよよにいろかそりゆく

(源 帚木)六中の品よかん人のこゝろよよおのグドのたてるおもむきみえて  
こゝろえ心得(狹)下六つらき方よおもひたると心得給ひて(同)十云々心得よまふ

(源 空蟬)九さどらん人のこゝろえつべけれど(同 末つむ)九内よも此方よこゝろえ  
たる人々よひりせ給ふ(狹)二十四大方の殿上人をどのこゝろえよつあまたま  
るらせ扇ともをさるものよて(源 帚木)四さりがき折ふのいらへこゝろえ

てうちかどむりりの随分よよろしきもおなりと見給ふれど  
○心もぞえる(枕)八其夜の事などいひ出さ心もぞ得給ふさうよふといひたらば  
あやかどや打りさぶき給へん

○心うらん(源 帚木)八さがいもうとまものよろしき聞えあるをおもひての給ふよ  
やとやこゝろらん

○心いえあがら(源 帚木)廿すまひ給ふを心いえあがら  
心えぞ(源 帚木)七こと人のいもんやうよこゝろえぞ仰らるゝとて中將よくむ(同)

四十心えぬすくせうちをへりける身をおもひつゞけてふ給へり  
○心もえぞ(狹)廿二あやと心もえねば御りへりもきこえあへぞかりぬ(源 末摘)

七さすがまうることかさよ入給ひぬれば心もえぞおもひけるほど合點ニ(後拾)五  
小倉の家よすみ侍りける比雨ふりける日蓑る人の侍りければ山吹の枝をりて

とらせ侍りけり心もえでまうり過て又の日山吹の心もえざりよよいひよおこせ  
て侍りける(源 末つむ)卅左近の命婦ひでのうねめやまドラひつらんかど心もえぞ

いひろふ(宇治拾)五いりよてぬるやらんと心もえざりけるをよ(同)六  
男大に驚きて心もえざりければ(同)十何とさしておるよよりあらんと露こゝろも

増補雑言集覽  
卷之四十一  
四十二



えでとるよ

心えがさく(源あらし)九 ささりやはたかりつるをみ風よいつのまにりふをぞ  
つらんとこゝろえがたく思へり(同やどり木)九 心えがさくおもひ出さ

**心ありけり**(玉葉)春下前大「花のちり鳥のまれかるころよもさく山吹のこゝ  
ろありけり」僧正仁澄

心ある(源空蟬)五 このまされる人よりの心あらんとめとゞめつべきさまたり  
心ある名(空穂菊の宴)九 此北方むりより形きよらに心ある名とり給へり

心あこさゞ(源夕顔)四 こゝろまどひて云々いとこゝろあこたゞいけれ(同紅  
葉賀)七 いとく心あわさゞいさにも(同若紫)七 四十宮よりもあをまそりし御むりへ

まとの給させさりつきバ心あこたゞいけてなん(同若菜)上ノ廿五 いとこゝろあわた  
たしうかゝらぞうづやりなる所(同)廿八 又とりりへはべくもあらぬ月日此過ゆけ  
バ心あわたゞいくあん

心あら(古)夏讀人「夏山よかくぞとゞぎはこゝろあらば物おもふ我ノ聲を死り  
せそ

心あやまり(源總角)十 又御せうそこあるよ心あやまりしてわづらさしう覺ゆきを  
とゝかう聞えまひて對面し給む季吟云心チソコナフ(同すま)廿九 哀よおもひ聞  
えし人を一ふしうしと思ひ聞えさせし心あやまり(伊勢物)百三 心あやまりや  
たりけんみこたちのつりひ給ひける人をあひいへりけり(うつろ國讓)上七 宰相  
心あやまりこそしりけれと覺て物もの給む(同)中ノ一八 宰相ノ妻子チあさま  
しう心あやまりしるやうよてよろしく聞えし女子をもちたづらよなつめるを  
(源楨柱)九 本性いとまづりよ心よくこめき給へる人の時々心あやまりして人よう  
とまれぬべき事かん打まどり給ひける

心あて(源ゆふのは)六 「心あてよそれりどぞとる若ら露の光をへさる夕ぐすの花  
(同帚木)四 こゝろあてよそれりかどとふ中(古)秋下「心あてよをらさや  
とらん初霜のおさまどいせるしら菊のそな(補續後拾)戀一「心あてよ人やしるら  
んたぐひかくつゝむおもひの身よあまるりか師光

心あさ(薄情カ深イ了)源空蟬八をりしかりつるほあけならバ云々とおぞしある  
もわろき御心あさなめりり(同橋姫)四 ほどよつけたる心あさよまでをさなき  
程を見きて奉りよなれば(同楨柱)初心あささひのためよぞ寺のけんもあらされ  
けん(後)秋中よみ「吹風よふりきたのこれむかしく秋の心をあさしとおもせん

心あさ(薄情カ深イ了)源空蟬八をりしかりつるほあけならバ云々とおぞしある  
もわろき御心あさなめりり(同橋姫)四 ほどよつけたる心あさよまでをさなき  
程を見きて奉りよなれば(同楨柱)初心あささひのためよぞ寺のけんもあらされ  
けん(後)秋中よみ「吹風よふりきたのこれむかしく秋の心をあさしとおもせん



(重之集)七 「ちる雪を花のさけりとみればさけの春の心此あさけあるべし(六帖)二

「おもひわび淵よもせよも落入をば人のこゝろのあさしとやいもん

心あしき(源 蜻蛉)八 心かどあしき御めのとやうのものやかうむりへ給へしとき、

てめざましがりてさむりたる人もやあらんと

心あひのりせ(催馬樂)道口とちのくちたけふのこふよこれありとおやよ申さ

べ心あひの風やさけんたちや(散木)思不「心あひの風をのめりせやへそが死ひ

まかまおもひよさちやをらふと(拾玉)述懐「數からぬ身のうき雲をふさむらへ我

をおもそん心あひの風

心さわぎ(狭)廿八 下何とおもひわく事なけれど心さわぎして胸つとふさがりたる

こゝち(源 ゆふのは)廿九 まづ此人のいりよなりぬるぞとおもほは心さわぎよその

うへも忘れ給とせ(同 浮ふね)廿九 くるからよ心さわぎのいとまされば

心さけり(蜻蛉日記)上 せへたる文よ心さけりついたらるやうよえつるうさ

まかん

心さま(源 紅葉賀)六 いとよきこゝろさまかさちよて(同 末摘)廿 物思ひいらぬやう

ある心さまをこらさんとおもふぞりいと云(同 東や)六 物りりぬべき御心さまとき

死て(同 帚木)五人よぬ心さまの

心ざし(志 源 あふひ)十 やんことか死方にいとこゝろざしそひ給ふべきこともし

できよこれ(同 蜻蛉)廿九 聲きくよぞ心ざしの人といりぬる(後)離別とちのく

よへまよりける人よ火うちをつらとせ(貫之)「折々ようちてた火の煙あらは

心ざしをををのべとぞ思ふ(源 蜻蛉)廿二 よき斑犀の帯太刀のをりきか袋よけれ

て云々 是の昔の人の御心ざしかりとておくらせてたり(同 みとつくし)十 御使よも

二かきさまの心ざしをつくれ(貫之集)十 筑後守の下るよ扇やるよくとへさる「あ

ふけどもつきせぬ風の君がためわがこゝろざし扇かりけり(後)戀男の心かせるけ

しきなりければたゞありぬるとき此男の心ざせりける扇よりきつけて侍ける(同)

一 女友どちのもとにつくしよりさしを心ざしとて 大江玉淵(同)雜詞云々 此を

せをおくるとて云々 し「道なれる此とさづねて心ざしありとみるよぞ音をばま

しける(同)離あひりて侍りける人のあからさまよこの國へまよりけるよぬさ

心ざしとて(同)賀左大臣の家にけふそく心ざしおくるとて 云々 僧都(拾)賀 五月五

日ちひさかざりちまを山すけのこよ入てさめまの朝臣の娘よこゝろざしと

て春宮大夫「こゝろざし深きみぎとよかるこもいとせのさつさいつらとをれん



(うつほ 吹上)下、四。吹上ヨリ 侍従らうそけなど心ざし皆して(同)下、四あるが中よ  
きよらかる女によそひ一具たゝみいれ一はうるそしき死ぬあやかと入てそわう  
の君よ心ざし(同 あて宮)四 兵衛の君よさうぞくして心ざし給ふとて(同 國讓)中、五  
大將も一のびてをりしきやうよて(源 夕顔)七 御心ざしの所よいことぢせむさいか  
どかべての所よ、むいどのとりよ心よく、すまかゝ給へり(同 桐つほ)六、廿そりあ  
はかもみぢよつけても心ざしをこえ奉り 云々(伊勢物)八十年比へて女のもとに  
ほ心ざしとさんとおおもひけん男哥とあんよとてやれりける(同)四、十うへのさ  
ぬをあらひて手づららそりけり心ざし、いたゝれど(土佐日記)つらくみゆれど  
心ざし、いせんとい(古)春上、よみ 人しらす 「心ざし深くそめてしをりければさえあへぬ雪の  
花とみゆらん(大和物)四 心ざしのまさらんよこそいあそめとおもふよ心ざしの  
そとさゝおあトやうかり(宇治拾)一 里村のものこれをとりに人よあゝろざし  
たわきもくひかどして(新千)釋 清水よこもりさりけるよ伊勢大輔まりあひても  
ろともよ御あり奉りておさみのそり死つてつゝあゝける 紫式部 「心ざし君よ  
かゝぐるともよ火のおあト光よあふぐられしよ

心ざし(瀨松)八、 われをのこにてかむり幽ならざりよごよ故宮うせ給ひぬると

見しものこゝろぎも物やの覺えし(補 宇治拾)十五 人々おほすぢあきものゝ心さ  
そかりとめけりとり

心ざよく(源 ゆふのは)四 今なんあみど佛の御ひりもこゝろぎよくまたれ侍るべ  
き(重之集)廿 「とあかえよ人のみこさる川かれバ心清くもたのまれぬるか(榮鶴  
の林)九 いまかん 云々 極樂よもこゝろ清くまゐり侍るべき(源 檣柱)八、りの疑ひおき  
て皆人のおしそりりし事さへ心ざよくてそぐい給ひけるかどをありがたう哀とお  
もひまよきこえ給ふもことわりよかん(同 蓬生)十 藪原よそぐい給へる人をバ心ざ  
よく我をこのみ給へるありさまとたづねきこえ給ふこといとかしくかんあるべき

(同 濤標)卅。 齋宮ノ ひきたがへ心ざよくてあつりひきこえん  
心ざたかさ(源 松風)十八 道詞 わり君の御事をかん六時のつとめよも猶心ざさなく  
打ませ侍ぬべきとて 云々(同 梅のえ)八、アキ物 いづれもむとくならせ定めたまふ  
を心ざさか死判者かめりときらひ給ふ(同 帚木)十 佛もなりく心ざたなしと給  
ひつべし(うつほ 國讓)下、十五 よべのうち物のせよ 云々 などりわすれさせ給ひにける  
心ざたかさ上達部も侍るものをと

心ざも 心肝(うつほ 藏開)上、八 わがかゝる恥を見つることさりとて院よあらんとて



すまばあやまちもしてよせられぬやうよ上さちも覺すべしまして人の心肝やそか  
らぬことゝこそいふ給ふあれ(同 國讓)上ノ十六七の寶ふり面をろく心ぎもさりえ  
し事の犬宮の御うぶや云々(狹)二下十九かうのみひとへは明くれ見奉り給ふまゝ心  
肝をのみくど死つゝ(雄畧紀)廿サラン不下罄竭心府誠勅慰懃(源 桐壺)十上参りてい  
とゞ心ぐるゝう心ぎもゝつくるやうよかんと内侍のすけれ奏し給ひゝを(同 浮舟)  
五いひかそす事とゞいといとゞ心ぎもゝつおれぬ(大和物)五心ぎもをまとそして  
もどむるよ(同)六わがさうぞくかどかくせ經するぞみるよ心ぎもゝかくかな  
死ことものにせ(同)三あまよかりたるるべしと見るよ目もくれぬこゝろぎも  
をまとそして云々(うつ布 藏開)上ノ二八十二まして人の心ぎもゝやせりらぬことゝこそい  
ふ死給ふあれ。文雄云こゝろといふをつよくいへるあり

心ゆるび(源)もみちの賀五あそれよこゝろゆるびか死御ことどもがを(蜻蛉日記)中  
年比をどよよに心ゆるびかくうゝとおもひつるをましてかくあさましくかりぬ云々  
(榮 松のしつえ)十左大殿も女御の御方よつと東宮おそしませばわりき御こゝろ  
よ心ゆるびかくゝるゝくおぞしめゝる(源 柳)廿七まいて人のまゐりまかぞとそ  
る事の音すれば尋ねとせ給ひて心ゆるびかく覺(同 蜻蛉)五十二大將の君いとい

さしもいりさちかどし給そぬほどよてまづう心ゆるびかきものよとあおもひ  
とり(同 若菜)上九今い目あるゝよ心ゆるびて(同 總角)十おのづら心ゆるび  
給ふ折もありかんとおもひわたる

心ゆる(夫)冊六登蓮法師「あゝぬ夜の心ゆる(夫)の手からひのこひゝとのみぞふでい  
かゝるゝ

心ゆく(万)三五長哥、吾宿に花ぞ咲さるををこれぞ心もゆりせ云々(源 紅葉賀)廿  
かゝこまりたるさまよて御いらへも聞え給ひねば心ゆるぬをめりといとほゝく覺  
は(同 帚木)四十五此二年をりぞかくて物し侍れと親のおきてよさげへりと思あ  
きて心ゆるぬやうよなん聞給ふる(平家物)妓王カもろともよねん佛してひとつそ  
ちはの身ともならんそれも猶こゝろゆりせこれよりいづちへもまよひ行いりな  
らんこけのむゝろ松がねよもふれふし命あらんかぎりねん佛して往生のそくを  
いとけん(源 楨柱)七おもひをめきこえし云々二條のおとゞいこゝろゆきたまふ  
あれバ

こゝろみ(源 紅葉賀)三こゝろその日かくつくしつれば(土佐日記)男もすがる日記  
といふものを女もトゝてこゝろみんとてをるなり今本ト一古戀一よみ「人の身も  
違へり」



あらそいものをあそびていさこゝろと戀やいぬると(和泉式部集)石山にあり  
なるやと都よりいつりの出るなどの給ひけるよ「こゝろみよおのぐ心もこゝろと  
んいざとやこへときてさそひみよ補(和泉式部物語)「こゝろとよ雨もふらなんや  
と過てそらく月のかげやとまると(宇治拾)廿七もいそぬものからほは狐さゞ  
心みよ同廿九利仁うちこらひて物の心とんとおもひて(古)戀二「志ぬるいのち  
いさもやすると心みに玉れをさりあそんといそかん  
補こゝろとこと(源常夏)七こゝろとことよねんころがらん人のねきことよあそ  
いあびき給そ

こゝろとえある(後拾)別長能「よのつねよ思ふこりれのたびならばこゝろみえある  
さむけせまーや

心ととりき(六帖)六「くひなごにたけけあくる夏のよをこゝろみとりき人や  
へりー

心志り(うつほ)國讓上四藏人の少將心志りの御めのとれもとよいひおこせさまふ  
(源わのあ)上ノ百三 大將こゝろりよあやかりつる

心志まる(源蜻蛉)四例のこゝろりまる侍従かよあひていりある事をかくいふぞ  
とあかひせよ

心づり(うつろ)樓の上下四仲忠おほやけよいとま給そりてこゝろづりあても  
の侍らんとそろ給へば

心いらぬ(源末摘)卅心志らぬ人々かぞ御ひとりゑみれとどがめあへり

心もいらぬ(源わの紫)四十門うちたけせ給へば心も志らぬものあけたるよ  
補心いらひ(源東や)七十五ふりそへさげらめきて心いらひのやうよおもそれ侍ら  
んも(同)四六十おりての車ヨすこー心いらひてさちさり給へり(落窪)一こゝろいら  
ひのようい過て

心ひとつ(伊勢物)三十一「いへばえいそねば胸よささされて心ひとつよなぐ頃  
りか(古)秋上左のおほ「をみあへー秋の野風にうちあびき心ひとつとせこれよよは  
らん補枕(五)十六まごねもひきとへのへぬ琴を心ひとつやりてさやうのりた志りつ  
る人のまへまでひく(續詞花)登蓮「故郷よおもひやりつなぐむれば心ひとつよ  
くもる月りか(伊勢物)續後三戀「あひみて心ひとつをかまーまの水のかがれて  
たえとどぞおもふ

心もとかい(源桐壺)三丁右こゝろもとあがらせ給て○此心もとかいと云事ヲおぞ

心もとかい(源桐壺)三丁右こゝろもとあがらせ給て○此心もとかいと云事ヲおぞ

心もとかい(源桐壺)三丁右こゝろもとあがらせ給て○此心もとかいと云事ヲおぞ

心もとかい(源桐壺)三丁右こゝろもとあがらせ給て○此心もとかいと云事ヲおぞ



つりかき事ヅトノミオモフハ大ナル誤也コレハ心のいられた待ニタヘデ急ガル、  
 ナ云也おぢつりかきニ用井タル處モアレドコ、ハ然ラズコ、ハ源氏ノ生レ出玉フ  
 ナトク見玉ハントテイツシカト待遠ク心セカレ玉フサマナイヘリ空蟬ニとつとの  
 ゑらせトいと不しとおぢして夜ふくることの心もとかきをのたまふトカケルモ待  
 遠キ意也枕草子ニころもとかきものトおぢつりかきものトナ別ニ擧たるよても  
 知べし同書ニかくかいそぎそのせやりよやれと扇をさし出てせいそぎさき、もい  
 れねをこりなくてすこしひき、ところををひてとゞめさせてたちたるをころも  
 となくよくしどぞおもひさるマタころもとかき物の條ニ人のもとよとこの物ぬ  
 ひよやりまつほど、物見よいそぎいで、いまやよくとくるしうるいりつゝあかた  
 をまもらへたるこゝち、子うむべき人のほど過るまでさるけしきれあき、遠き處  
 よりおもふ人のふをえてかたく封したるそくひかどもあちあくる心もとかし、  
 此外竹取ヨリ宇治拾遺マデノ世々ミナコノコ、口也大和物ニみづからさゞいま參  
 りてといひてさとし車とりよやりて待をさいとこころもとかし、竹取、山の限りか  
 くおもしろし世またとふべきよあらざりしと此枝ををりてしりばさらし心もと  
 かくて舟よのりて云々マタ天人遅しとこころもとかがり給ふ、伊勢物、とくいさんと

おもふよおほとき給ひろく給さんとてつりのさざりけまこのうまのかとこころも  
 とながりて又いとこころもとなくて待をれば、落窪、夜も明かんと心もとかくいひ  
 ありに、土佐日記、九日こころもとかきよあけぬから舟をひきつゝのすれば川の水  
 かければるざりよのみるさる、宇治拾遺、例の光りもの山より池の上を飛行けるよ  
 起むもこころもとかくてあふのきよねかからよく引て射さりければ云々(枕)三花  
 びらのそしよをりしきよほひこそ心もとかくつきためれアルカナ(同)八、こころも  
 とあき物。此をちしを見る(同)十一、それわたらせ給ひてのち宮へ出させ給ふべ  
 しとあればいと心もとかしとおもふるとよ日さしあがりてぞおそしまは(同)三、い  
 りからんと心もとかくおもふよからうとてうねめ八人馬よのせてひき出めり(同)  
 十一、いでまことよろれしき事によべ侍りしを心もとかくおもひありしてかん(同)  
 二十一、くらさるとよ文をえて火ともすずとも心もとかれよや火をけの火をさきとあ  
 たりてさどとよしけにえたることをりしけれ(源すま)四冊つくり繪つりうまつらせ  
 せやと心もとかがりあへり(宇治拾)いづらきぬやと心もとかがりありたり(詞花)  
戀上道命「ほどもかくくる、とおもひし冬の日にこころもとかれをりもありけり(大  
 和物)三、みどりこゝちのまごおこりてねどいとむつりし心もとかく侍れば



かんまるりつる

**補**心もうせて(宇治拾)廿三このかよものぞとどふよ心もうせてわれよもあらで

**補**心もいぬよ(万)十一「うさをらの沖つあそのり打あびき心もいぬよおも不ゆるりも(同)十九云々こゝろもいぬよかくちどりりも(同)十七」あらたまのどいか

へるまであひえねバ心もいぬよおも不ゆるかも(同)七三十打あび死心もいぬよ

**補**心をこ(中務集)「荻の葉れ色づくどよもあるものを心をこくも風のふくりか

こゝち(源 桐壺)六そのどいの夏みやす所はりあきこゝちよこづらひて釋氏要覽曰

心地者佛言三界中以心為主衆生猶天地五穀五果從大地生如是心法生世出世善惡五

趣三乘三界唯心故名心地(貫之集)「大をらつくもらさりけり神無月いぐれこゝ

ちいこれのみぞをる

あゝちをこり(大鏡)世中こゝちをこりて

**補**こゝちよき(源 夕霧)廿六けさやりあるけい死よもあらでめさまいけよこゝちよが

ほよこよひもつれあきを

こゝちたぐふ(源 總角)六十心ちもこがひていとなやまう覺え給ふ

こゝちのうちおもふこと(枕)二心ぬくもの物まうせして云々 寺まての法師社にて

の禰宜かどのあさゝりまわがこゝちのうちおもふ事かどをあやまらでまさゞまよ

おしそりりつゝさゝよく申あやさる

こゝちおくる(源 蜻蛉)四十まめ人のさげよ心とゞめて物語をるこそこゝちおく

れたらん人いくるいけれ

あゝちまどふ(源 ゆふのは)四十馬よりすべりおりに云々こゝちまどひれバ(伊勢

物)初 おも不えせ里よいとそいたかくてありければこゝちまどひまけり

あゝちあやまりて(源 わのさ)上四けさのゆ死よやこゝちあやまりていとあやま

くまべれバ

こゝちあゝき(源 わのし)廿四こゝちあゝとてよりふいぬ

こゝちゆき(源 繪合)廿二鳥のさへづるほどこゝちゆきめでたきあさざらけあり(同

わのさ)上九こゝちゆきけよとゞこりなかるべきよ(ナ)もうちまいれバ

あゝちもあき(源 蜻蛉)五十なまゝの人のめれてこゝちあのかさまやと物うければ

**補**こゝちをこ(源 湊標)二かすいたてたまひて御こゝちをこくかんおせけり

こゝぬり(和泉式部集)「君がへんちよのむとめれかが月のけふこゝぬりのきくを

こそつめ(拾)秋射恒 「かが月のこゝぬりごとよつむ菊の花のりひかくおいはなる







**補**こゝしき(万)七「神さぶるいねこゝしきみよ野のそくまり山ぞみればりあ  
しも(同)十三長哥云々石根のこゝしき道のいせとこの根をへる川(同)四十七こ  
こゝしきもいそのあむさび

**こゝひのもり**(拾)哀傷 右大臣「こゝまごまつきよとかく時鳥まゝてこゝひの森のい  
りよぞ

**こゝもと**(狹)三十七上まことりの蓬がもとにいづれぞととせ給へば云々こゝもと  
ま侍る(瀨松)八顔くまかう白うをりしけまよもとこそ少おくれたりけれと見  
ゆる所かう(枕)十二云々こそめでたけれこゝもと云々

**こえ**(肥)宇治拾八ふぐりのあたりせめてくるしきまでこえ給ひぬ(續古事談)此朝  
成のあさましくこえてとめ人よことなりけるよや**補**(著聞)十おひたゞしく肥ふと  
りて(源柏木)三つぶくこえてしろううつくし(同東屋)廿七いたくこえすぎまた  
るあんひたちどのとの見えける(空穂藏開)卅一いとおろきやりまふつゝりよこえ  
給ひつるが色しらくものくくおそぬ

**補**こえとるくるま(井蛙抄)道よこえとる車のあるをみて「やせうしよこえくる  
まをぞかけてけるといふ連歌をせられけると

**こえん**後宴(源花の宴)八その日こえんのことありてまぎれくらし給ひつさうの  
ことつらうまつり給ふ

**補**こえく(能宣集)そそ松山馬のりどもおりてやそみ侍る「音よきく末  
のまつ山けふこそ打くるかみのこえく見め

**補**こて(壁ヌル)職人歌合(詞)云々家よてこておとりてこカヘヌ  
具也

**こて**(源東や)十こたひの頭の疑なく御門の御口づらこて給へるあり  
こてのせよ(源やとり木)八御うぶやいあひ三日の例のたゞみやの御わさくこて  
よて五日の夜の大将殿よりさんとき五十具碁の錢云々(空穂あて宮)三雙六のそ  
んでうごのくのでとくよてさまりへてこてのせよ白りねまておかト箱よて奉れさ  
り

**こてふ**(古)戀四よみ「月夜よし夜よしと人よつけやらばこてふよたりまたせ  
もあら**補**(拾)貫之「こてふよもよたるものりを花すきこひしき人よとにべり  
りけり(仲文集)「春のどふ心づりひをたつぬれば花のさよりよこてふかりけり

**補**こあゆ(小年魚)山家下「あらかまよこあゆひりれてくごるせよもちまうけさる  
こめれしきあみ



【こざ】(源 桐つは)七廿くわざの御座ひきいれのおとゞの御座

【こさり(夫)九】定家「水もかさ小坂をおつるゆふさちの瀧つせうつるもとのたよ川補

【玉葉】雜一 定家「おのづから秋のあそれを身よつけてかへるこさりれゆふぐれのうさ

【こさんかれ】補○平家物語などに多き詞也こそあれをつゞめさる音便也(長門本)

云ありのまゝよぞ申けるふしぎの事をさんかれとてさらばりの人の來たらん時々

【こざう】(源 野分)三東のわたどの、小さうトのりをよりつまどのあきたるひまを

【こざけ】(年中行事歌合)十七番 前大納言 「いくちよもたえををへん六月のけふれこざけ

もさみがまよく

【あさふく(夫)十三】爲家「こさふくバくもりもぞをるみちのくれえぞよいせト秋のよ

の月

【こさめ(神樂)】おとらこまうどのひとへのかりぎぬ云々こさめよをせぬらせ云々補

【(万)十一】「ぬを玉のくろかみ山北山をけよ小雨ふりしきまくくおもほゆ(同)十一

十「大野らよ小雨ふりく木のもどよときよよりこさがおもふ人

【こさせト】補(新古)雜中「山里の人こさせトとおもえねどとをる、ことぞうとくな

り行(万代)秋上 惠慶 「思ふ人こさせまよき處りかえりきが原北萩のさりりい

【こされ】來(伊勢物)六十九あーさよ狩よ出たて、やりぬふさりいかへりてそこよこ

させけり 補こぎ 小木(順集) 此こぎのおひいで、よろづ代のおい木よならんまでの心をへ

をよませ給ふよ云々 ○河社云こさの小木也

【こぎ(榮)うらく】御車よかうトさちをさできひとつをりる袋よいれて補(空穗

吹上)下おあトろくろひきものでき云々こがねのこさよれまゐりものおあトろを

り

【これいる】(万)廿六「池水よ影さへとえてされよほふあーびの花を袖よこされか

(同)廿九袖に古伎禮都

【あさとゞめ】(家持集)「春風のふくよさきさつ梅の花君がためよぞあれとゞめつる

【こさちらを】(古)雜上 行平 「こさちらを瀧のいらたまひろひおきて世のうき時のあみど

よぞかる

【こさきり】濃香(後)春上、開院 左大臣 「かやざりよをりつるものをうめの花これりよ我やこ

もそめてん

【こさよれる】(清正集)十一「春風をやへよつ浪のいろよさへいろこれよれる井出のや



まぶさ

こきたれ(後)戀四「引まゆのかくふたでもりせまろくもこきたれてかくをこ

せせや(古)戀三「あなぬとてかへるみちよこきたれて雨も涙もふりそやちつ

つ(万代)春上「あすまつ、空うちきらいこきたれて花のちるごとあわゆきぞふる

(玉葉)冬順徳院「神無月あらまま下るむら雨にいろこきたれて散このそりか(續

(古)春下後鳥羽院「やまひめ此かすみのをでやほるらん花こきたれて春雨ぞふる(同)

秋下行「あー引の山田のいねのりさより露こきたれて秋風ぞふく(同)冬家持「ふ

く風よちるごよをいささる山の紅葉こきたれ時雨さへふる

こけおろは(堀太)紅葉「露のみとおもひけるりあもるやまよみぢこきおろを名

まこそありけれ

こぎと小君(源)帚木四十またの日小君めいたれば

こゆ(古)春上「梅の花よふもるべいくらお山やみよこゆれどしるくぞありける

(新勅)戀一、よみ「夢かれバみゆるるらんかさぎの此世の人れこゆる橋りは

(補)こゆの意「コ、ヨリ」(万)十八「そと、ぎいどふ時かあやめ草かづらよせん日こゆ

かきとれ(同)十八「そと、ぎすこよかきわたれとも火をつくよまをぞへそのか

たも見む(三)卷

こゆと小弓(源)わらわか上九けさ大將のもの給ふいづりたよぞいとさうと

きを例の小弓いさせてとるべありけり(補)金葉上出居よおきたりける小弓をとり

て

こめ(空穂)國讓下三さてこのこめいなつをろもよ

こめ(枕)九ノわらわへのこりき人の根こめ吹折られたる前裁かとをとりあつめ

おこしたてかとするを(同)十一御車こめ十五四つ(尼車)後春中河原「けふさ

くら果よわが身いさぬれんかこめよさを風のかぬまよ(万)十七「我宿のそかた

ち花を花こめよ玉よぞあがぬくまよさくするみ

こめ(源)若紫九ふせでのうちよこめたりつるものとて

こめいさる(源)東や廿八さまようこめいたる物からかよあからせ

こめりう(源)ととめ廿十四よなんおそしけるいとこめりう(瀆松)二てもこ

めりうをりけかるを

こめて(空穂)俊蔭上三ちまよおもひくぐれどの給ふべき人よなれば心よこめ

てありへ給ふ(源)蜻蛉六いとこめてよあらくとおそして(同)ととめ十一かよ



ていえ物からひ給ひととしてづりなる所にこめ奉り(同 さいのき)五十おどりのおもひのまゝよこめたる所おとせぬ本性よいとゞ老の御ひがをさへをひよたれば何でどりのとゞこり給せん

**こめき**(空穂 國讓)中五兵衛の君のこめきたる人のかみさねに一尺をりりあまりて(同)上五志づ殿の女御のやうよておもやせ給へるのあてよこめきさり(源 帚木)十たゞひさふるよあめきてやむらりならん人をとかくひ死つくろひていあどりみざらん

**こまつ**(和名)六水漿類白飲四時食制經云冬宜食白飲和名古美都今案濃漿之名也

**こい**(輿 榮つきのえん)廿香のこい火のこいかどみかあるわざなり(和名)葬送具火輿

**おー**(越 後)春下「垣をーは散くる花をみるよりのねこめは風の吹もあさかん(新 伊勢)古(雜二 圓融院)「かきでーはみるあどびとの家櫻をかちるをりり行てをらそや(拾)戀さ

ねあきらの朝臣まうてきたりけきいまたれでーは物語ー侍ける(同)雜上讀「かこのーま松原おーはかくさづのあかなぐー聞人なーは(源 花の宴)十木丁でー

よ手をとらへて

**こー**(濃 古)物名「うちつけよこーとや花の色をこんおく白つゆのをむるをりり

**補**(古)哀傷貫之「色もりもむりーのこさよはへとも植けん人のかげぞこひーき(躬

恒集)「菊の花これもうけきも今までは霜のおりせいろを見まーや「初ーぐれふりそめーよりきくの花こかりー色ぞまさまさりける

**こト**(万)八「こぞのそるいこトて植ー吾宿のわりきの梅の花さだよけり

**でー**(五師 源 玉葛)十。ヤハタマウでーとしてそやくおやのかたらひー大とこのこれるぞよびとりて

**こー**いたくて(宇治拾)七、とー老こーいたくて

**こー**いたきまで(狹)三、上おろき大殿おーいたきまでいでいりいそぎ給ふ(補 万代)賀圓融院 「こーをいたとつめるをりあれおるーは松をためーはひりざらめやの

**こー**さあき(源 若紫)一さゞこのつづらをりのおもよおおト小柴垣かれどうるをー

**こー**あまち(五 七日)玉葉(雜 前大納言爲家)まかりて五七日の佛事ー侍ける 云々

**こー**ぞれ(哥 云)源東や(四)こーをれたる歌あせせものぐさりりうをんをー

**こー**のた(源 すま)廿こーかさ此山の霧をるりよて(補 後拾)羈旅「ままれうらをけ







**補** 聲のそる (蜻蛉日記) 中、物もいひさして聲のそる心ちそればあそいさめらへば

こゑたて、(源) 源わの紫 四十さそがよこゑさて、ゆえなれ給を

○こゑよさて、(古) 戀二、ふ「虫のこゑこゑにさて、いかりねども涙のこゑを下よ

かぐるれ

こゑをど布とく (源) 東や三うづもれてとへけれをよこゑなど布とく、うち

ゆがとぬべく物うちいふ

**補** 聲のいろ (散木) (風雅) 春上「くれなるの梅がえよかくうぐひをいこゑれいろさ

へことよぞありける

こゑのいたしさま (源) わのし 七十その人りの人のこと笛もいハ聲のいざしさま 云々

**補** 聲のあや (後) 秋上「秋くれバ野もせ虫のおりきたるこゑれあやをバたれりき

るらん

こゑけそひ (源) 寄生 九十 いらへうちするこゑけそひのはれりなれど

**補** こそく (能宣集) 「山人のたける庭火のおきありこそく、あそふ神のたねり

も (陽成院哥合) 「よそ人も秋のをしきを浅ぢふのうへもこそく、鹿やかくらん

こゑあるひと (源) わの紫 四十御供ハ聲ある人してうたせ給ふ

**補** こゑもどがら (新勅) 秋上「白露とくさ葉よおきて秋のよをこゑもどがらよあく

るまつむい

こひ (源) 桐のは 廿このさびいおぞし、りてこひをかき給ふ (古) 一「郭公なくやさつ

きのあやめぐさあやめもいらぬ戀もそる哉 ころる (古) 戀 ころふれど (古) 戀 ころひむ

(古) 戀 ころひき (古) 戀 ころひく (金槐) 上

こひち (頼政集) 下 (加茂保憲女集) (源) 葵 七十袖ぬる、戀ぢ 云々 (相摸集) (袖中抄)

(蜻蛉日記) 長 (榮) 晚待星 三

こひかかひむ (源) 手習 八たごが戀かなひむ

**補** こひりね (新勅) 雜一 俊成「古のくもるの花よこひりねて身を忘れても見つる春りな

**補** こひかぐさめ (千載) 戀二 道因「あふならぬこひかぐさめ此あらはあそつれなひとて

も思ひたえめや (六帖) 「秋風をさむまはあらせかへきて戀かぐさめん衣かせ

死み (月詣) 戀中皇大 后宮大進「待りねて戀かぐさめにる月のやがて心をよへいざあふ

こひかき (源) 浮舟 五十あづまの人よかりてま、もいま戀かき侍るいつとふりく

こそと給れ

**補** 戀うら (戀) 占 (月詣) 戀中皇嘉 門院武藏「なやざりれ手せさよする戀うらもあふよあふ



はうれしかりけり

**補**こひのよち (万代) 戀五九條 前内大臣 契のよあたの大野のまくせら戀のたよちよ秋風ぞふく

**補**こひのよち (月詣) 戀下 定 「こよひこそつゝとかねてのむらひつれ戀のよみどよぬれしまくらも

**補**こひのむ (万) 四十七ノ 四十六 てるるゝとつととりをへこひのよてあがまつ時よ

**補**こひのやつこ (万) 八二 こひのやつこよわきのねぬべし (同) 十六 十五 こひのやつこのつ

りよかゝりて **補** (千載) 誹諧 俊頼 「あさひくる戀のやつこの旅よても身のくせなれや夕とゞろき (万) 八二 「まはらをのさと心もいまのあし戀のやつこよこれのいぬべし

**補**こひのやま (狭) 一 上 をとありがたきこひの山よしもまよひ侍らんと猶ことせくをかるけしきやあるらん (六帖) 四 「いりむりこひてふ山のふりけき入といりぬる人まよふらん (源) わさ 下 八十六 ちりきさめしをおすにぞこひの山路のえもどくまとき御心まとりける

**補**こひのやま (頼政集) 下 「とへがしあうき世の中よありくして心とつくる戀のや

まひを **補** (金葉) 戀下 小大進 「かくむり戀のやまひのおもけれとめよあけさけてあまぬきとらあ

**補**こひのけふり (堀次) 忍戀 大進

**補**こひのみ (六帖) 下 「秋風の野分山分吹かれと戀のよよわくよしもあし

**補**こひくさ (草) 万 四十五 「こひくさをちから車よあくるまつみてこふらくわがこ

ころから (月詣) 戀中 重久 「あでしこそわが戀草のゆりりとてあづさふ露よ袖をしどる (千載) 戀二 顯家 「よとよもよつれをき人をこひ草の露にぞれます秋のゆふぐれ (月詣) 戀下 定快 「戀草のしげとがかりれくせのそのこの秋よりぞ恨をめれん

**補**こひでろも (風雅) 戀二 土御門院 「いもまつと山れいづくよさちぬれてをぞちよけらしとがこひでろも

**補**こひく (万) 四十二 四十四 「こひくしてあひさるものを月よあれば夜のこもるらんあ

ましありまで (同) 八十二 八十八 「こひくしてのちもあそむとあささる心よあくばいきてあらめやも

**補**こひぬ (古) 戀一 人 「戀しねとするさならぬを玉のよるのそがらよ夢よ見えつゝ



こひいら (千載) 騷旅 基俊 「あたら夜をいせれたまをたどりしきていもこひいらよ見つ

る月うか 玉葉 戀四 公顯 「霰ふりからのおちたま風ふきてものこひいらよさよ更

行 (万代) 戀四 二品親王覺性 「ねやの戸をさゝで幾夜よかりぬらん君こひいらよ月をか

がめて (同) 戀四 鎌倉 右大臣 「玉ざれのこまれひまもる秋風のいも戀しら身よぞしみける

こひいらのお (源) 手習 三 廿かどおすれがたまをよとめ給へせなりよげんと戀しのお

ぶ心ありけま 三 廿かどおすれがたまをよとめ給へせなりよげんと戀しのお

こひいらきみち (後) 雜 三 「あたまぬまよ戀しきまちもいをよしをなとられしきにまどふ

こころぞ 三 「あたまぬまよ戀しきまちもいをよしをなとられしきにまどふ

補 こひ 水よよせ (伊勢集) 「つこの國比つこのほり江よ雨ふればかぎりもいらせたま

るわがこひ (後) 戀三 陽成院 「つくさねのそねよりおつるみかの川こひをつもりてふち

とかりぬる 陽成院 「つくさねのそねよりおつるみかの川こひをつもりてふち

補 こひ (山家) 下 「宇治川のそやせおちまふをう舟のかつきよちかふこひのむら

まけ 下 「宇治川のそやせおちまふをう舟のかつきよちかふこひのむら

補 こも (和泉式部集) 石藏の宮の御もとよちまを奉るとして「ふるさたれこもをぞ

られる君がためたまのころもの袖よかくらんかへ「ふるさはのこものかたみよか

りけきど君がたまの玉ぞかへれる (拾) 雜 賀 五月五日ちひさきかさりちまを山菅

の籠よ入て爲まさの朝臣のむすめよころざれとて 道綱 「心ざしふる泥みぎとよ

刈こも千年の五月いつりよをれん (万代) 戀一 土御門院 「涙河我故とよをらば夕の

ますけのをこもよそにくちつ、 万葉ナルハ 櫛 落葉ニ多シ (本草和名) 敗蒲席。布留岐加末古毛

補 こも 海萐。記傳十四 六十一

こもち 御物 (三代實錄) 四十老人 爾 賜御物

補 こもちがら (六帖) 「かつのよれこもちがらすのさかぞか一夜ふかくおれてき

みをやりつる

こもちのおまへ (源) 柏木 十五日の夜の中宮の御方より子持の御前のもの云々

こもちのきみ (源) みをつくし 子持の君も月頃物をのみおもひいづとて (とりりへ

そや) 三 こもちの君もてづらりきふせてあつりひ給ふさまいとあわれなり

こもり 水守 (枕) 四ノ 雪ノ山 廿七。ノ所 こもりといふもの、ついちのほとよひさしきしてゐ

たるを

こもり (神代紀) 幽居 (源) 丸の菜 下ノ 五十 うそべの人よかびきおいらりよ見えながら

うちとけぬけしき下よこもりて (古) 春上よみ 人しらす 「かすが野のなふのなやれをわりく



さ此つまもこもれりこれもこもれり(源わら紫)五さも人のこもりぬべきところ  
どころもありながら(同)廿うちへもまるらで二三日こもりおまはる(補)万(万)十八  
「やぶあまの里よやどくり春雨にこもりつゝむと妹よつげつや

**補**こもりぬ(万)十七十六「許母利奴能たゆこひあまりあらをみのいちどろくいでぬ  
人のいるべく(清輔集)「こもりぬよづむかそづ山吹の花れをりよぞねのかり  
きける

**補**こもりづま(万)十九十九「それのぬよさをとるきゞはいちどろくねよもかりむこ  
もりづまろも

**補**こもりこひ(籠戀)万(万)十七廿九こもりこひいきづきとさり  
こもん(源横笛)五からのこもんの紅梅の御どの

こもの(籠物)源わら紫上ノこもの四をえをりひつ物よそぢ(古事談)一圓融院子  
日御幸條侍臣等起居執籠物(補)万代(賀)圓融院より子日の又此あしたよこものども  
のをりしきをたてまつらせ給うさりければ

こまくら(新古)旅定頼「磯かれてこゝろもとれぬこまくらあらくかけそ水の  
あらか(補)後拾(勢大輔)「こまくらかりの旅ねよありさをやいり江れあいのひ

とよむかりを

**補**こもすざれ(新拾)誹諧後西園寺入道前太政大臣「風あらし山田の庵れこもすたれ時雨をりけ  
てもるこのをりか(夫)卅常磐井入道太政大臣「たづらかるわらや此軒のこもすざれこれや  
あがこのをるしかるらん

**こせ**後世(源蜻蛉)廿佛をうるべよて後世をのみ契しよ  
**補**こせ(瘡)散木(田上)侍りし比りたひをかたよるて手のりさむりてよめる「あ  
やしさひみかもとこをおもひつれさざへいこせのうちにはぞありける

**補**こせ(玉葉)戀四為實一行螢おのれもえそふかけみえて人のおもひもさぞとつけこせ  
**(新古)**雜下家隆「春日山たよのうもれ木くちぬともさよよつけこせ峯の松風(月清)上  
「をりくゝいそやまをいづる鳥のこゑながめさびぬと人よつけこせ(伊勢物)後

秋上「どぶねたる雲のうへまでいぬべくば秋風ふくとかりよつ々こせ  
業平

**こせち**五節(續紀)十五天平十五年五月癸卯宴群臣於内裏皇太子親舞(五節)新勅(戀)  
五節所よそべりける女

**こせん**御前(源葵)七おとかくしき御前の人々のかくなんといへどえとゞめあへ  
ぞ(同)卅御車さし出てこせんかと参りあつまるやど(通鑑栗磧傳)云自可驅至御前

會補雅言集覽



坐制之補(宇治拾)十御せんさちさのいたくをらひ給ひてさび給をよコハ女ヲサ

越(源 關屋)二つくさねの山をふれこれ風もうきたるこちいで(拾)冬八丸(古)

興風 「浦ちりくふりくる雪の白浪のそる此まつやまこけりとぞみる補(金葉) 雜上 顯國

「こゆる氷のいそぎてあひかひもかくをよりこはとさくひまことり(貫之集)

「松がえよされてかゝる藤かみを今のまつやまこけりとぞ見る(後拾) 雜二よみ

「あさ氷瀨をこすいりごのつかよわえな不此くれもあやふりけり(万) 廿「た

りまごのをさかふきまは秋風まひもときあけあざひあらせども

○こえ(万) 廿三「まつち山ゆふこえゆきていそさきやすまた川原まひとりかもね

ん(拾) 別兼盛 「さよりあらばいりてみやこへつけやらんけふ若ら川の關のこえぬと

○補(新古) 雜中 「さうれうらをまつ葉ままかりむればこせゑによはる

あまれつり舟(後) 戀五 「もろともにいざといそせの志での山こゆともこさんもの

ならなくよ(古) 大哥所 「かひかねをねま山ま吹風を人まもがもやことづてや

らん(後拾) 戀四 元輔 「契さかかたま袖をしりつゝ末れまつ山浪こさどと(拾) 雜上

よみ人 「かこれま松むらこまかくたづのあかかかかきくひとさか(後

拾) 雜二 「あづまぢのそれさらからひきさりとあふさきまでいこさどとぞおもふ

相摸

(玉葉) 春下 「春風の山れさのねをふれこせばこせゑもえぬ花を散ける(隆信集)

「おとそ山もみぢゝるうふ梢よりあらをこさぬせれもりもがな

補(心) 小簾。濱臣云とすといふべきをこすとよめる歌此頃のなべてあてあがち

れが今い心(顯季卿集) 「さくら花これのまどほりちるから塵さへふの拂そで

ぞみる(同) 「たちをかのまのまとそまふりせさ袖ふるとおもひけるかか

(頼政集) 「木の葉ふくあらやこそをあげつらんもらふまをさきちりのつもれる

(同) 「おちゝがふよどの河舟これをあらまのまをこし人をまをれかねつる(同) 「人

いそせ物をぞ思ふ野分してこれふく風まひまの見ねども(拾愚) 上「よそへてのり

ひまをかけれまつ人のこれのどこ夏花まさけども(月詣) 見衣戀を「ちらせをやこ

はよもつる、袖のうちま入ぬるたまのぬい誰ぞと(万代) 戀四鎌倉「玉ざれのこ

はのひまもの秋風いもこひいらま身まぞみける(新後) 秋上「かさより萩の

いけををつさひきてこすれ間さむき秋風ぞふく(堀川院艶書合) 「玉ざれのこれの

まどほく見てより君まこゝろをかけぬ日ぞかた

補(心) 水末。水をこといふ(拾) 戀三よみ「たゝくとてやどのつま戸とあはた

れば人もこせゑのくひなりけり(夫) 十七「つてまれくちたれりもがかとあひ思ふ

定家



こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

**水木**

水田やうの地曲

（各）

（各）

こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

こぞゑのをしよなくの聲（天の十小）

増補雅言集覽卷之四十一終







增補雅言集覽

五

813.6-1619g-Nn



\*1200600630327\*

集約濟 9冊



8/3.6

I 6199

NND



